

A S S B

(オルタナティブ・システムズ・スタディ・ブレティン)

第12号 (1994年3月28日発行)

目次

- | | |
|---|------|
| 1. 労働の「人間化」は可能か? (上) | 千田智之 |
| 2. 精神医学の現場から
<i>BORDER/LINE</i> (14) | 平野 啓 |
| 3. もう一つの社会革命論
アリスメンディアリエタ試論 | 安藤一夫 |
| 4. ASSB誌刊行計画 | 安藤一夫 |

編集人 安藤一夫

発行所 ASSB編集委員会
京都市左京区田中門前町42 共生舎

会費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万5千円

会費振込先 (郵便振替)

(口座番号) 京都9-67283 (口座名) 資本論研究会

労働の「人間化」は可能か？ (上)

— 経済成長と労働・雇用・所得

千田 智之

ビッグ・トレード・オフの再来

ようやく景気後退が反転し始めた、と言うより、幾つかの予測機関やエコノミストの見通しが明るさを取り戻そうとしている。兆しとして明瞭なものはまだわずかしかないが、だいたい今年度後半から緩やかに景気回復が現れ、3～4年の、短くかつ小さな“好況”が見込まれるというのが主な観測である。例えば、三和総研の嶋中雄二は、経済企画庁課長の小峰隆夫との対談で、昨年10月に「大底を打った」と発言している(週刊『エコノミスト』94年3月15日号)。また、日本経済研究センターも2月8日に発表した「日本経済5カ年予測(94～98年度)」で、今年度の実質GNPを▲0.3%と見込み(93年度政府最終見通しは、GDPベースで実質0.2%成長)、93～98年の平均伸び率を年3.6%としている。

これらの《予測》にケチをつける気はまったくない。企業業績その他の景気指標がそろそろ前年比プラスに転じるのも、それまでの下降状況を考えると十分あり得ることだ。2月の全国百貨店売上も前年比マイナス幅を縮小している。天候や円高、コメ不足騒ぎその他の外生的要因を考えると、内実は少し回復しているのかも知れない。だが、日本経済研究センターが、今回の《不況》の長期化の原因として挙げている、①大幅なストック調整、②金融政策の失敗、③93年前半の一時的要因、などが克服されたと見るのは早計だろう。

何よりも今回の不況の「複合性」が、経済の自律的な活動で解決されるものではないからである。金融面だけから見ても、バブル期の「資産インフレ」を抑制するために執られた、89年5月末から91年6月末までの「金融引き締め」政策の言わば「残存効果」が一掃されるには、まだ1～2年はかかる。それゆえに、多くのエコノミストが自信を持って予測を発表できないのだが、ここまで経済予測が現実と離れてしまって来たことについて、徹底した批判的分析が必要になっていたはずだ。もち論、職業的にやむを得ず《予測》や《観測》をしなければならないとされている人達が多いことは、このように分業特化した「社会」では当然のことなのだが、そのような人達にしても自らの「武器」を点検しなければならない時代である(「経済論評1」参照)。

1960年代末のジョンソン政権において、大統領経済諮問委員会(CEA)の委員長を務めたアーサー・M・オークンは、「景気後退は、現在では一般的に、ハリケーンとは異なるが航空機の墜落のように、基本的には防止可能であると考えられている。しかしわれわれは、航空機墜落をこの国でゼロにはしていないし、また、われわれが景気後退を無くしてしまう知恵なり能力なりを持っているとは確言できない。その危険は去っていない。繰り返し起こる景気後退を生み出す諸力は単に出番を待っている形で、依然として舞台脇にひかえているのである」(The Political Economy of Prosperity, 1970年)と述べたことがある。「ゴールデン・シックスティーズ」と呼ばれた好景気の末期にはあるが。

彼は、「オークンの法則」で有名だ。この法則は、P・A・サムエルソンの簡潔な説明によると、「産出における変化と失業とのあいだの関係がいかに密接であるかを示しており、GNPが潜在的GNPとの比較で2パーセント低下するごとに失業率が1パーセント・ポイント上昇するというもの」

である(サムエルソン/ノードハウス『経済学』第13版、岩波書店刊)。このオークンが、60年代の好況時期において最も悩んだ問題が「効率」と「衡平」のトレード・オフ、あるいはディレンマであった。

それはつまり、市場競争の激化に経済成長を任せれば、効率的に経済的成果が得られるとしても、社会的な弱者が多数生み出され、放置されるため、社会の「衡平」が失われ、それはいずれ経済の衰退の要因になってしまうが、逆に、弱者救済に力を入れ、政府の役割を大きくすると、たちまち経済は不効率になり、活力が失われるという関係になることを意味している。彼は、これを『平等か効率か』(1975年)で言及した。その本の副題は「ビッグ・トレード・オフ」であった。

しかし、これはディレンマとしてはまだ救いのありそうなものであったかも知れない。70年代の最初の深刻な景気後退(ドルのバーゲンから第1次オイル・ショックによる)においては、失業率の上昇とインフレーションが同時に起こるといふ(スタグフレーション)が先進国を襲った。失業率を低下させるためには、多少のインフレ政策はやむを得ないし、インフレを抑制するためには多少の失業率の上昇は覚悟しなければならないという、「失業」と「インフレ」のトレード・オフが、言わばそれまでの経済学的常識であった(アラン・S・ブラインダー『ハードヘッド・ソフトハート』TBSブリタニカ刊、原著1987年)。

この常識はまだ生きていて、プリンストン大学経済学教授のブラインダー(マクロ理論専攻)は、誤ったインフレ抑制策は、取り返しのつかない失業率の上昇を経験しなければならず、高い失業は社会的なロスであるとしている。デフレとディス・インフレの区別が困難であるように、インフレを回避して、失業率の上昇を押さえる政策理論をまだ経済学は知らない。

だが、それにもまして相互依存が高まり、国際化した経済においては、「競争力」と「雇用」というトレード・オフが登場して来ている。アメリカ政府は明確に時代遅れの「近隣窮乏化論」を政策コンセプトに据えている。日本の貿易不均衡(出超)がアメリカの雇用を危機に陥れているのだから、アメリカの輸出競争力の回復が雇用の安定だと言うものである(前月の「経済論評11」参照)。しかし、アメリカの代表的な大企業は、現実にはレイ・オフという「合理化」を推進することによって「競争力」を回復させている。景気回復の伸びの割合と失業率の低減が一致しない。

実は、日本経済もこのトレード・オフを別の形で経験している。それは、輸出競争力のある企業ほど海外進出を図り、そのために国内の雇用が削減されるという形で現れている(野口悠紀雄『日本経済改革の構図』東洋経済新報社刊)。ことは輸出に関するものだけではない。国内市場においても、各企業は「競争力」のために雇用を減らすという、「リストラ戦略」を採用している。雇用を維持しようとする、市場競争力が失われると考えられているならば、これはまさしくトレード・オフの関係が成立することになる。

雇用人員もストックであり、生産にとっては投入要素である。産業経済のストック調整は、在庫調整、出荷・生産調整、ついには設備投資の調整から雇用調整に至る。雇用の調整は、単に人員の合理化という数量調整にとどまらない。生産性の上昇を至上命題とするならば、勤務・労働の形態やルールの変更から雇用システムそのものの変更となるだろう。

今や、単なる《不況》——つまり、循環的な景気後退という意味であるが——が問題ではなくなっていると思われる。経済学とは、そもそも例えば「バターか大砲か」というトレード・オフ(一方の採用が必ず他方の制約となる、限定された選択可能性)の中で、最適の解決を与えてくれるメカニズムを研究するものであったはずだ。サムエルソンの教科書には最初にそれが出てくるし、彼は、混合経済を是とするから、「市場」と「政府」のバランスによってそれを得られるものとしている。しか

し、依然として「自由な市場システム」がそれを見いだしてくれるという意見も根強い。また、失敗が歴史的に明らかになった社会主義計画経済も、この問題を解決する方法と信じられた時もあったのである。

はたして、効率と衡平、失業とインフレ、競争力と雇用などの「ビッグ・トレード・オフ」を経済学は解決できるのだろうか。さらに、環境保全と経済成長と言う、根源的かつ長期的なそれを「背景」に持っている現代において、何を根拠としてこれらの問題を考えればよいのだろうか。日本経済は、この点でどのような変化を経験するのだろうか。

幾つかの神話

経済的なトレード・オフの難問は、そのような事実や現象をもたらす一定の仕組み(政策や制度あるいはシステム)を前提として起きる。従って、現在の政策や制度がもし「正しい」ものでなければ、トレード・オフの難問に悩む必要はなくなる。このような難問が明らかに生じているということ、しかも、その仕組みを是とする理論や理念がそのトレード・オフを明らかに解決できないとすれば、現在の政策や制度——そのすべてかあるいは一部分——が疑いようもなく「正しくない」と考えなくてはならない。

ここで「正しい」かどうかは道徳的な価値判断も大きくかわることであるが、少なくともそれが政策や制度に関するものであるかぎり、正しいということは、つまり必然的に受け入れざるを得ないものであるか、あるいは多くの人がそれを受け入れたいと考えていることを意味している。多くの人が受け入れたいと考えることは維持するに値するとしても、《難問》の存在がそれを否定することもあるだろう。ここで大事なことは、政策と制度とシステムなどを簡単に同一視しないことであろう。それは、「考うるあらゆる種類の行動にあてはまる『説明』は、ある種の行動の何が特殊なのかを明らかにしようというときには役に立たない」(R・L・ハイルブローナー『21世紀の資本主義』ダイヤモンド社刊)ことは、真実であると考えなくてはならないからである。

しかし、「特定の経済体制を与件とすると、われわれは客観的にその機能の技術的特徴を描写することができる。しかし、一つの経済体制を描写する以上、ひそかに道徳的判断をとり入れないわけにはいかないだろう。なぜならば一つの経済体制を外部から眺めることは、それが可能な唯一の体制でないことを意味しているからである」(J・ロビンソン『経済学の考え方』岩波書店刊、原著1962年)とすると、解決不能のトレード・オフを生み出すものは、何らかの政策か、あるいは制度やシステムかということではなく、「特定の経済体制」そのものであると考える方が妥当であろう。

それは、必然的に受け入れざるを得ないような天賦の自然(例えば、地球環境とか人間の生命の有限性のようなもの)ではない。とりあえず、多くの人々の存在を維持するためにのみ——もっとも、ある場合には特定の人々のためのものかも知れないとしても——必要な「仕組み」であるはずである。そのためには、現代の社会ではそれは、人々が存在するための「所得」をもたらしてくれるものでなくてはならない。この所得とは、「雇用された労働」だけによるものではないが、貨幣制経済社会においては、社会保障による移転所得であろうと、利子所得という不労所得であろうと、いずれにしても金銭収入という形態が保証されていなくてはならない。

何よりも、トレード・オフの《難問》は、人々の所得と雇用に集中して現れる。それは、「国民所得」の成長と分配(さらに再分配)、その意味においては、そのほぼ7割を占める雇用者所得の問題なのである。それゆえに、「完全雇用」という言葉は、たとえロビンソンが、それは「自由放任の新しい弁護に用いられるようになった」(前掲書)と批判した《イデオロギー》であっても、人々にと

って切実な響きを失うことはない。

だが、今や多くの人々は、「雇用されているとき、人間はいちばん満足なのだ」(ベンジャミン・フランクリン)と単純に考えることはできないだろう。としても、もしその雇用が奪われるとしたら、「われわれの社会では、人から職あるいは所得を奪うことは精神的な殺人である。なぜならそれは、お前には存在する理由がないと宣告するに等しいからである」(マルチン・ルーサー・キング牧師)ということに同意するかも知れない。このように、「雇用の満足」と「失業の恐怖」の間には、「個人の威厳や自尊心に値札をつけることはできないけれども、それらは、もし失えば途方もない喪失感を伴う貴重な商品であることにだれしも異論はあるまい」(A・S・ブラインダー)という認識があるだろう。

従って、ブラインダーが指摘している通り、人々がインフレの危険よりも雇用の喪失を惧れるのは当然であるし、インフレそれ自体は、例えばハイパー・インフレが生じないかぎり、惧れるべきことではないと言うことにも一理あるかも知れない。だが、「完全雇用が保守派のスローガンになった理由は、雇用は、それを自己目的とするかぎり、その内容についてはどんな問いもなげかけられないという点にある。何を目的とした仕事であるか？ それは、ただ労働者を禍いからまもることを目的とするものにすぎない。その中身はどのような生産物でもよいのである」(ロビンソン)とすれば、それは「特定の経済体制」であるがゆえのトレード・オフを解決したことにはならない。

特に日本経済においては、地価が高く、住居水準が先進国並ではなくとも、あるいは長時間の通勤や様々な問題を抱えた労働条件などが強いられていても、失業率が低いという事実がそれらの問題が表面化することを押さえて来た。多くの世論調査においても、「雇用の安定」が「物価の安定」よりも上位で望まれるということはいずれもなかったと言える。とは言え、それらは日本の社会の底辺部や零細企業の従業員の現実を直視しないものであったことは論をまたない(特に最近発表されたもので、このような隠れた事実を見つめたものとしては、アンドレ・レノレ『出る杭はうたれる』同時代ライブラリー、岩波書店刊に注目すべきだろう)。

だが、現下の《不景気》は、多くの識者やエコノミストが指摘するように、日本経済の《聖域》を侵し始めた。何を根拠としたものかは不明であるが、アメリカン・エクスプレス銀行は、日本の失業率は、公式発表の2.7% (昨年11月時点)を遙かに上回る9.6%であると報告している。また、現実に「雇用調整助成金」の支給労働者は、業種、総数ともに86年時の「円高不況」を越えており、「企業内失業者」は数百万人存在していると囁かれているのも周知の事実である。

だが、ここでは「雇用の不安」が顕在化して来たことを問題にしているのではない。中小企業労働者が常にそのような不安定性にさらされていることは今さら強調する程のことではなく、また、大企業サラリーマンと言えども、経済情勢の変化や技術・産業構造の変化によっては、「構造的不況」業種として合理化や縮小再編の対象となって来たことは枚挙に暇のないことである。

問題は、それでも多くの人々が、この「特定の経済体制」を受け入れて来たという歴史的事実である。幾つかの問題があっても、それは致命的な《難問》ではなく、いずれ経済の自然の趨勢——経済学的に表現すれば、市場システムによって均衡点を回復すると言うことになる——か、あるいは、政府や産業界が、何とか解決してくれるものと、人々が考えて来たことを問題とするべきだろう。そして、その「考え」は依然として大勢を占めているのであって、果たしてそのようなものとして看過してよいものかどうか、という問題である。

当然ながら、何度も繰り返すようだが、現に従っている制度やシステムを頭から疑うという習慣は一般にはない。無機的で残酷な要素を多々持っていようと、人々がそこで生きている世界は基本的

に人々を裏切るものではないと信じられているからこそ秩序として維持されるものだろう。

社会的目的の問題は、それぞれの時代に依りて新しい形をとるものであるが、しかし、それらの形の奥には一つの基本的な原理が横たわっている。すなわち、進歩は主として社会的善の増進のために、たんに最高というだけではなく最強の人間性を利用する程度のいかに依存しているということ、これである。いったい、真の社会的善とは何かということについて、若干の疑問もないではないが、しかし、それらの疑問も、この基本的な原理の基礎を危うくするほどのことはない。というのは、幸福は自尊心を強め、また、希望は幸福を強めることから、社会的善は、主として曇りのない幸福を生み出す能力を完全に働かせ、それを発展させることのなかに見出しうるという点については、同意の得られる基盤がたんに存在していたからである。

この文章だけを読めば、これが、新古典派の巨頭アルフレッド・マーシャルのもの(『産業と貿易』、原著1919年)であるとは、俄かには信じられないかも知れない。「自由放任」の市場経済も、内容はともかくとして「社会的善」を目的としており、そこでの競争の勝利者こそがその実現の役割を担うと信じられていたのである。ここには、18世紀の最大のテーマの一つとしての「平等主義の神話」が生きていた。マーシャルにとっては、市場経済はそれなりの「騎士道」を参加者に要求し、それに応え得るものが経済的勝利者なのであった(井上義朗『市場経済学の源流』中公新書、参照)。

日本経済もこれまで、そういう意味での幾つかの「神話」に支えられていたのではないか。土地神話は崩壊しても、人々にはそれゆえに「(所得の)平等神話」があり、日本という国は、社会保障の充実した「福祉国家」であり、その割には欧米先進国に比べて「国民負担」が小さいと思われているのである。誤解がないように言えば、「神話」とは単に比喩的なものではなく、政府統計や政策として、あるいは多くの学問的な研究からも、共通認識ないし《通念》として語られて来たがゆえに、信じられていたものと言うことである。また、そのような社会的意識あるいは信念体系が《秩序》を支える力を一定程度持っていることによって、「神話」と呼ぶことができる。

R・K・マートンが「トーマスの公理」(もしひとがある状況を真実であると決めれば、その状況は結果においても真実である、と言うもの)と名づけた「自己成就の予言」も言わば「神話」であるが、この「誤謬の支配」は《事実》によって覆される(『社会理論と社会構造』みすず書房刊)。例えば、「会社主義」という集団の心理——特に大企業において発生するもので、零細企業には関係がないが、大企業内部での競争、生産性の向上、教育・研修の充実などにおいて現実に機能的に役立つ心理状態である——は、「過労死」や「強制的な希望退職」などという事実の前では崩れざるを得ない。だが、このような個別的体験だけでは崩れない「神話」も存在するし、社会的にはそれらの方が意味は重いと思われる。

その代表的なものは幾つかあげられる。日本の社会にかぎって言えば、所得分配の平等性、社会的流動性の高さ、国民負担率(租税負担と社会保障負担)の相対的な低さ、あるいは国民負担の高い国は経済停滞に陥りやすいことなどの通説がそれである。また、現代の社会に広がって止まないものとしては、依然として人々は、「社会の進歩は経済の成長により、それは生活水準の向上である」と考えていることをあげることができるかも知れない。

すべての研究成果をフォローすることはできないが、公共経済学関係では最近、これらの「通説」を批判するものが幾つか見られる。例えば、京都大学教授の橋本俊昭(労働経済学)は、『世界』3月号に「所得分配平等の“神話”は崩れた」を発表している。また、東京大学教授の宮島洋(財政学

）は、『高齢化時代の社会経済学』（岩波書店刊）で、「国民負担」と「社会保障」に関する通説を批判している。

特に、所得分配の不平等性の存在の指摘は大きな意味を持っている。橋木は、同論文で、比較的良好な経済パフォーマンスを持ちながら、しかも所得分配が平等だと言われていた日本経済は、もともと必ずしも平等ではなく、特にこの近年は著しくかつ急激に不平等化していると報告している。その原因としては、①賃金所得の不平等化の高まり、②資産所得格差の拡大、③税の所得再分配効果の弱まり、があげられているが、問題は、日本の所得分配の不平等度は、先進諸国の中でも最高であり、しかも、この「不平等化現象」が国民に実感として認識されていないことである、としている。

こうしたことは、今次の不況が明らかにしたものではない。橋木によると、十数年前に国際比較研究として有名なソイヤーの研究によっても、日本はOECD諸国の中でも、北欧諸国と並ぶ程の所得分配の平等性が高いと結論づけられていた。このような国際的な評価も疑わしいとされる。石崎唯雄の先駆的な貢献があるのだが、要するに日本の実状を知るデータに欠陥があると言うのである。

同様な指摘は、宮島にも見られる。日本で議論される国民負担率やその相対的規模の国際比較において、日本でそれらは「国民所得」比率であるのに対して、OECDの国際比較歳入統計では一貫して「国内総生産（GDP）」比率が用いられている。国民所得比を用いることはヨーロッパ諸国の国民負担率をやや高目に、日本の国民負担率をやや低目に評価していることになるのである。しかし、それらを統計的に補正しても、先進諸国と比較すれば、日本はアメリカとともに「低福祉・低負担＝小さな政府」に属することになる（橋木論文「累進消費税導入で社会保障を」、週刊『エコノミスト』94年3月23日号、参照）。

さらに、宮島は、先進諸国の統計を比較して、実質経済成長率と平均国民負担率との間には負（マイナス）の相関関係は見られないとしている。つまり、国民負担率の上昇が一概に経済成長を阻害するものではないと言う訳である。「たしかに、行政の効率化、規制の緩和とともに、急速な本格的高齢化社会の到来を睨んだ中長期的財政運営の目標として国民負担率の抑制を強調することには一見強い説得力が認められる。しかしながら、実は、こうした経済的影響の確実性や政策目標の妥当性はミクロ経済的にも、マクロ経済的にも、必ずしも自明の理ではないし、実証済みでもないのである」（前掲書）という指摘は、これまでの通説や通念に従ってはい間違いないことを意味している。但し、統計上の比較考量では、詳細な制度的相違は捨象されてしまうことには注意がいるが、

従って、ここで、本来ならば、橋木や宮島の分析が正しいかどうかの判断をしなければならないかも知れない。だが、重要なことは、彼らがその分析の基本には「より公正で、より公平」な制度に現行の制度を改編すべきだという主張を持っていることである。橋木は、『エコノミスト』の論文においては、社会保障制度と税制は統合すべきだし、一定の税率を付加価値に課す、現行の「消費税」（比例付加価値税）をやめて、逆進性のない累進消費税（累進税率による申告制の支出税）の採用を提起している。「制度」を変えよ、と言っているのである。現在の制度の下では、経済厚生と経済効率を同時に高めることは困難である以上、それらの制度の改革は必然であろう。

このように、幾つかの「神話」が既に成り立たないことが明らかにされつつある。ここではあげられなかった、さらに他の「神話」もまだ存在していることは言うまでもないが、実践としての改革の困難性に比べれば、それらを追究し、論証することはさして困難ではないだろう。だが、いかに税制や社会保障制度の改革が謳われても、それらは「特定の経済体制」を支える根幹を形成している以上、それらだけを改革できると考えることは無理ではないか。

かつて、ガルブレイスは、「社会の進歩が生活水準の向上と同一だということは、一つの信仰のよ

うな面をもっている。われわれの社会ほど高い生活水準をもたらした社会はいまだかつてなかった、したがってわれわれの社会くらい良い社会はない、というわけだ。ときにはこうした信念を疑問視する向きもあるけれど、それがどんなに論理的に根拠のあるものであっても、耳をかしてもらえない」（『新しい産業国家』河出書房新社刊、原著1967年）と慨嘆したことがある。だが、所得や社会保障（とその負担）において不平等が存在し、しかもその所得が不安定な状態におかれたままで、それゆえに社会的公正が失われるとすれば、社会的な緊張は高まるだろう。だとすると、短絡的に社会変動の行く末を語る前に、その「所得」や「生活水準」は何によって得られるのかを考えておかななくてはならない。所得を生み出す労働とは何か、である。

老碩学の提起

最近、経済学関係では、言わば老大家と言うか、碩学とも言うべき人達の発言が目立つ。86才のガルブレイス（1908年生）の『満足の文化』（新潮社刊）が昨年邦訳出版されているし、同じく85才のP・F・ドラッカー（1909年生）の『ポスト資本主義社会』（ダイヤモンド社刊）も出た。結構ベスト・セラーになっている。今年に入っても、75才のハイルブローナー（1919年生）の『21世紀の資本主義』が邦訳されている。但し、これはアメリカで昨年評判を呼んだ程には、日本では注目されていないようだ。これらのことに何か特別の意味を探ることはないのだが、20世紀末の現在を彼らは決して肯定的には見ていないことに関心がある。老碩学の言うところに耳を傾けるべきだと思う。

日本でも同様で、昨年秋に『市民社会とレギュレーション』（岩波書店刊）を世に問うた平田清明は、1922年生まれ（47年東京商科大学卒業）である。また、71才になろうかという森嶋通夫（1923年生、46年京都大学経済学部卒業）が、『思想としての近代経済学』（岩波新書）を発表している。そして、『世界』4月号に「『成長』ではなく『労働の人間化』を！」を発表した都留重人（一橋大学名誉教授）は、1912年生まれ（35年ハーバード大学卒業）というから今年で82才である。彼らの弛みのない研鑽を云々するのではなく、高齢となっても《現実》との格闘を失わないことが素晴らしい。揶揄して言うのではないが、これが「高齢化社会」の生き方としてのモデルかも知れない。

ここでは、都留と森嶋に注目しておきたい。都留の論文で言う「労働の人間化」については、近年だけでなく、以前から様々な指摘や分析があることは承知している（例えば、熊沢誠——後述）。しかし、それは多くの場合、労働経済学や労働運動論あるいは労働組織論などのテーマとして語られて来た。それも必要かつ重要であることは論をまたないし、それはそれとしてフォローを心掛けたい。だが、そのような専門領域にとどめるのではなく、それを、日本の雇用や所得の発生と配分の現実の中で考えて見たいということと、そのことで「経済学」全体としてはどのような変化や発展があり得るのか、という2つのポイントから眺めてみるというのが、当面の関心であり、両大家に注目するゆえんである。

都留は、同論文の主旨として、「特に日本のような先進工業国にとり、福祉問題を論ずる規範的な概念構成を組み立て直す必要があると思われ、ここにあえて思考の転換を求めると述べている。それは、論文の冒頭でジョン・ステュアート・ミルの『政治経済学原理』（原著1848年）から長い引用をしている（「富と人口の際限のない増加は、この地球上の生活を快適にしている数多くのものを根絶してしまう。……人びとの心が、ともかく先へ進むことばかりにとられることがないようになれば、生活の内実をゆたかにする余地もあり、それが更に改良される見込みは、いっそう強まるだろう。」）ことに象徴されるように、環境制約下における経済成長をどのように考えるかに尽きる。その問題意識は、結局2つのことに集約されている。つまり、一つには、経済学は、「規範性を含意

した経済学の大きな質的転換を予想したものに変わらなくてはならないのではないか、さらに、二つには、「労働というインプットを『非効用』としてでなく、生きがいという積極的な満足感を満たす活動とみなす可能性」があるのだから、それを追求すべきではないか、ということになる。二つ目のことが、都留にとっては「労働の人間化」という問題提起にかかわっている。

結論を急ぐ前に、第一の「近代経済学の反省」として彼があげているのは、「労働が主観的犠牲を表現するものとして『非効用』と呼ばれたり、資本の生産性を『節欲』の概念でもって説明したりする『新古典派』が、長期にわたって教壇経済学を支配した」ことと、「個人は社会を相手にして、労苦を伴う労働力提供を行うかわりに金銭的な代償を受け取る」ということを近代経済学は、労働の供給の「基本的な考え方」として来たことである。

経済学の歴史から見れば、それは、「ちょうどミルがこの世を去った1870年代のころから、経済思想史での大きな転換があり、古典時代の生産関係に規定された価値論から主観主義的な効用に注目する価値論へと経済分析の基本視点が移っていき、個人の消費をその出発点とする限界効用学説が支配する時代を迎えた」（同論文）ということになる。つまり、古典時代の価値論とは、リカードやマルクスのものであり、限界効用学説の登場は、ワルラス、ジェボンズ、メンガーによる。

だが、この都留の指摘と似たことは、かつてロビンソンが行っている。彼女は、「新古典派学説の平等主義的要素が不毛なものになったのは、主として、極大にすべき対象を効用から物質的な産出量にすりかえる方法が採用されたことに原因がある。物質的財貨のより小さな総量でも、平等に分配されれば、不平等に分配されたはるかに大きな総量よりも一層大きな効用を生むことは、たしかに容認されることだが、しかし、もしわれわれが財貨のその総量ばかりに目を向けていれば、効用のことを忘れ去るのは容易である」（前掲書）と都留よりも踏み込んだ指摘を行っている。

とは言え、異端派と見なされたロビンソンの影響力は小さいものであった。「経済学」はずっと自己革新の機会を失って来ている。だが、若き日のマーシャルがケムブリッジ大学の「就任公開講義」（1885年）で語った言葉には、今に引き継がれるべき斬新さと謙虚さがあった。

経済学の見方を現在の世代が変化させた点は、人間自身が多分に環境の所産であり、また環境とともに変化するという発見にもとづいている。今世紀初頭におけるイギリス経済学者のおもな欠陥は、彼らが歴史や統計を無視したことにあつたのではなく、人間をいわば不変量とみなして、その変化の研究にほとんど力を労しなかったことにあつた。それゆえ彼らは、需要供給の力が、現実にあるよりもはるかに機械的で規則正しい作用をもつものとしたのである。彼らのもっとも致命的な欠陥は、産業上の慣習や制度がいかに変化し易いものであるかを理解しなかったことである。

（中略）

経済学的推理の中心構造は高度の先験的な普遍性をもつものと考えながらも、わたくしは経済学説にたいしては、なんらの普遍性を認めるものではない。それは具体的な真理の集まりではなくて、具体的真理を発見するための機関（エンジン）なのである。

これは、J・M・ケインズがマーシャルを追悼するために書いた評伝（1925年）に含まれている文章で、ケインズ自身が講義録「経済学の現状」から抜粋した（ケインズ『人物評伝』岩波書店刊、原著1956年——彼の死後編集出版された）。新古典派の巨頭のマーシャルでさえ、「経済学」は変わり得ると考えたことをこれは示している。しかし、ミル、マーシャル、サムエルソンの3人が世界史的に見た「経済学教科書」の歴代の執筆者であったのだ。マーシャルは、ミルの教科書（『政治経済学

原理』初版1848年刊、第7版1871年刊まで続く）に学び、ケインズやロビンソン、あるいはサムエルソンもマーシャルの教科書（『経済学原理』初版1890年刊、第9版まで続く）が出発点であった。現代の経済学は、伊東光晴（京都大学名誉教授）が幾つかの機会に、それで学んだ若手の経済学者の限界を批判しているとしても、サムエルソンの教科書を越えるものを持っていない。

森嶋は『思想としての近代経済学』（94年2月刊）において、近代経済学のスタートをD・リカードにしているが、その主著『経済学および課税の原理』（1817年）以来、上記のように築かれた「学としての伝統」は果たして変えられ得るものであろうか。それが、どのように変えられるべきかについては、森嶋の提起を見る必要がある。

森嶋の「新書」は、市場経済の価格メカニズムは、「耐久財のディレンマ」を抱えているために「均衡解」を発見できない、ということと、資本主義の安定性を望むならば、経済学は、他の社会科学、特に社会学と結合して「広義の経済学」へと展開しなければならない、ということの2点を重要な視점에据えている。彼は、それだけでなく更に他方面への関心を示しているのだが、ここに関係することでは、上記以外に、J・K・ヒックスが考えた土地市場と労働市場の「社会学」的性格、奴隷売買の経験のない国（例えば、日本）とそれを有する国との労働市場の違い、労働と雇用に関する「私企業官僚制」、資本主義の土台—上部構造に関する弁証法的唯物論（あるいは史的唯物論）の問題などをあげることができる。この後、先程の都留の問題提起と絡めながらこれらのテーマを順次検討して行きたい。

ところで、この異色の「近代経済学」論は、その対象にマルクス、ウェーバー、パレート、高田保馬を含めており、特に、リカード、L・ワルラス、マルクスを「近代経済学の第1世代」としてあげている。マルクスがリカードの影響を強く受けていることは従来から指摘されていた。マルクス自身もリカードに理論的に依拠していることを隠してはいないが、森嶋は、理念化された「完全市場」モデルを彼らが共通した「市場観」としていることに注目している。マルクスの市場観を表していると森嶋が考えるのは、『賃労働と資本』の次のような記述である。

同じ商品が、種々の売手によって提供される。……彼らはいずれも売りたいのであり、……したがって或る売手は、他の売手より安く売る。……この競争は、彼らによって提供される商品の価格を下落させる。

だが買手たちの間にも競争が生ずるのであって、それは今度は、提供される商品の価格を騰貴させる。

最後に、買手たちと売手たちとの間に競争が生ずる。……この競争の結果は、……買手たちの隊内の競争が強いと売手たちの隊内の競争が強いかに、依存するであろう。

森嶋は、「このような市場観は、全くワルラスのものである」と言う。「それゆえ経済学は長い間、このような市場観に立って競争機構を分析して来たのだ」が、現実の経済でこのような状況が成立するのは例外に近い。需給によって価格が変化する市場と、価格が固定的で需給数量が調整される市場があるし、例えば、信用やのれんを重視する企業や商人は簡単に「安売り」はしない。あるいは定期的な安売り（バーゲンと言う名のイベント）を企む販売業者もまたそれを期待して待つ消費者も、ここでは「自由競争」が成立していないことをよく知っている。そういう意味では、確かに、「完全競争」は、抽象化された理論や数式の中でしか成立しないだろう。

しかし、ワルラスが仮定した、一般均衡論の成立する純粋経済学の世界では、「階級闘争」は絶対

に生じることがない。失業も差別もあり得ない。この点は後で詳しく検討するが、伊東光晴によれば、「ワルラスにあっては能力があるならば、誰でも資金が供給されるというビジネス・デモクラシーを仮定し、また競争を阻害する土地私有が廃される世界であった」（伊東光晴／根井雅弘『シュンペーター——孤高の経済学者』岩波新書）のであり、「市場観」の表面的な一致をもってマルクスとワルラスを同一線上に並べることに無理がある。

もっとも、ワルラスは、自ら「科学的社会主義者」と名乗り、伊東も指摘している通り、土地私有制を否定していたから、彼の「未完の構想」（後述）、つまり理論（純粋）経済学から応用（政策）経済学、さらには社会経済学へと言う、壮大な《体系》がもし完成していたならば、マルクスと同様の結論（理想ないしビジョン）——それは、例えばマルクスが『ゴータ綱領批判』で述べたものと同じものとなり得たであろう——を獲得していたかも知れない。だが、残念ながら、森嶋は、ワルラスの純粋経済学以降の著作や思考に見るべきものはないと指摘しているし、伊東によれば、晩年のワルラス（75才）を訪れたJ・A・シュンペーターは、その耄碌に落胆し、希望していた議論を諦めて帰ったという。

もっとも、森嶋は、このような仮定に基づく「経済学」の限界を指摘することに重きをおいており、「多様な経済主体」が登場する現実の世界においては、それゆえに、さらに「市場」は均衡解を得られないため失業が存在するのが現実の常態であって、所得や資産の不平等は拡大するのであるから、その点でのマルクスの指摘は依然として正しく、しかしそれゆえに資本主義分析には「上部構造」の研究が必要となる、とするのである。

ここで、彼が「上部構造」としてあげているものは、良質の福祉、厚生、文化、教育などであり、それらにアプローチするためには、経済学は、社会学や社会心理学の成果をとり入れ、「経済学の総合科学化」が特に必要だと主張する。しかしそれでも森嶋は、「これらすべてにもかかわらず、生産力の発展に応じて生産関係が変わり、それに伴って上部構造が代わるという、マルクス、エンゲルスの基本図式の説明力は、人間がますます合理的になった将来では、一層大きくなるものと考えられる」と述べている。もち論、社会的変化は「合理的精神」だけで推進されるものではないが、「しかし長期には合理性は必ず貫徹されるであろう」（森嶋）とすると、先に触れた都留重人が展望するところの、言わば「近代的経済合理性の棄却」、つまり地球環境との持続的かつ調和的な関係を維持するためには、「経済成長」を抑止するべきだとする主張とは相入れない。

ここが最も重要なポイントとなるだろう。森嶋は、「（マルクス自身が認めるように）唯物史観が有効であるのは、資本主義生産の体制がある程度準備されていること、人々が経済合理的に行動していることが条件である」と言う。人々の経済合理性とは、社会意識である。それは、従って「上部構造」であり、それゆえに「土台」（生産力と生産関係）との関係、つまり規定性や相互の影響について考え方を整理しておかなくてはならない。これは後の議論のためにも必要なことである。

定式化された唯物史観においては、生産力→生産関係→上部構造の経路で歴史は展開されると主張されて来た。もち論、森嶋も、マルクスやエンゲルスはこのような「定式」に決して「盲従」していないことを認めている。しかし、「上部構造の一要素である宗教の勤労倫理が生産力に与える影響をマルクスは見逃している」と言う指摘は正しくない。また、上部構造→生産力への逆規定に関して、「科学は明らかに上部構造の一要素であるが、機械の発明があって初めて生産力が発展したのだから、上部構造の物理学こそが生産力を発展させたのである」という認識を示しているが、これもまったく誤りで、歴史的事実だけでその反証ができる（例えば、J・リフキン『脱牛肉文明への挑戦』ダイヤモンド社刊）。但し、この引用に続く下記の文章は興味あるポイントを持っている。

しかし、たしかに紡績機械が発明されると、産業革命は直ちに起こったが、ニュートンの『プリンキピア』（1867年）の発表と紡績機械の発明の間には70年以上もの時間がかかっている。というのは、期間を極端に長くとらない限り、期間内の科学的進歩の生産力効果はゼロであり、期間を長くとっても、期間内のどの時点で発明が起こるかは、確率論的にすら何もわからない。また新作詩法、新画風、新哲学（それから経済学研究！）等の文化は生産力に何ら貢献することがないであろう。それゆえマルクスやエンゲルスは一般には上部構造から生産力への逆影響はないと考え、生産力に影響を与える場合でも上部構造の変化（発明）の影響は不規則であり、したがって生産力の変化は外生的に生じると考える。

詳しく反論する紙幅がないが、これは余りにも一面的な理解である。科学史や技術史の基本的な理解を欠いているし、何よりもマルクスやエンゲルスは、上部構造そのものの相対的独立性と、その経済的構造（いわゆる「土台」）への反作用を強く指摘している。つまり経済作用は全体として自己を貫徹するが、この作用はまたこれによって生み出され、かつ相対的独立性を与えられた上部構造そのものの運動によって反作用を受ける。上部構造におけるいろいろな運動はそれぞれの内にある「固有の法則」に従うとともに、この運動に内在し、そしてこの運動の中で「徐々に発展した相対的独立性によって」、経済作用にも反作用を与える。従って、「全体的な大きな推移は交互作用の形態で進行する」と彼らは考えたのである（F・エンゲルス『史的唯物論に関する手紙』などを見よ）。

さらに、教条的マルクス主義者であっても、「社会意識のある形態は、経済的土台の影響を、単に直接的にだけでなく、また社会的=政治的諸関係を通じ、階級闘争を通じ、もしくは一部分は社会の土台により近く接近している社会意識の他の形態を通じて受ける。所与の時代に存在するイデオロギーの諸形態は、しばしば前の時代の諸条件によって生み出された思想的内容を保存している。……それぞれのイデオロギーの領域——法理論、政治理論、道徳、宗教、芸術など——は、社会意識の特別な独特の形態で自己の特別な発展相をもっている」（コンスタンチーノフ『史的唯物論』）と述べているのである。

なるほど、土台と上部構造との作用と反作用の現れ方については、時間的にはまさしく「確率論的にすら何もわからない」だろう。それは、極めて早い場合もあれば、合理的には考えられない程時間を要する場合もあるかも知れない。だが、そのことをもって経済理論から、発明や発見の影響を排除してしまったのでは、シュンペーターの経済学への貢献を否定してしまうことになるだろう。また、かつてマーシャルが語った有名な言葉、「経済学について未だ書かれざる諸章のうち、もっとも重要なもののひとつは、知識がひろまってゆくのが遅いということの結果、経済的諸原因と諸結果との間に介在する時間についてである」（『産業経済学』原著1879年）という認識から「経済学」は抜け出していないことになってしまう。

今や、経済学は、その理論に時間的要素を組み入れた「動学理論」が主流となり、現代は情報化社会である。われわれは、知識や情報が広まることの余りの早さのために、その内実の解釈をないがしろにし、知識や理論が《実践》とは乖離してしまっていることを何ら不自然に思わなくなってしまっている。在野の思想家の関懐野が、「今世紀は知識産業の空前の発展が思想家の怠慢と無力を覆い隠してしまった世紀だった」（「オイゲン・ローゼンシュトック=ヒュッシーにおける語り・歴史・革命」、『現代思想』94年2月号）と嘆いてみせるのも、頷けることである。

（続く、1994.3.25.記）

「『欲望』の精神病理学」の欲望

1. 鈴木国文は、「日本精神病理学会15回大会」において、「『欲望』の精神病理学にむけて」というタイトルで、ラカン派の立場から、精神病理学固有の困難を確認し、精神分析学が提供する欲望概念から、精神病理学の展望を開こうと試みている。(『臨床精神病理』vol.14, No.1 Mar 1993所収)この場合、鈴木が精神病理学の固有な困難を立証するための材料は、ヤスバースである。彼によれば、ヤスバースは、三つの大きな謎を残したという。この三つの謎こそ精神病理学に固有の困難を反映していると、彼は言う。

一つは、了解の根拠としてあげられる明証性にかかわる謎である。...明証性は、それ以上遡ることができない根拠だと言うのみで、なんら答えを示していない。これに答えないうまま、了解はいたるところで限界にぶつかり、その限界のあとには説明に頼らざるをえない。残り二つの謎は、この了解と了解不能なものとの関係、もう一つは了解と説明との関係である。了解不能なもの領域に Jaspersは身体と、実存の二つを見ている。身体にかかわるものは因果連関に委ねられる。一方、実存とは、いわゆる実範疇、つまり死との関わり、決断、自由などで、Jaspersはそれは経験的説明に委ねられるものではなく、哲学的説明に引き渡されるべきものだとし、次のようにいう。「このことからほとんど克服し難い曖昧さが生ずる.....それは、了解においては了解不能なものが前提とされ、一緒に考え組み込まれているということだ。」と。これは重要な指摘なのだが、Jaspersはこの問題をそれ以上追求していない...三つめの謎、了解と説明の関係については、これまで既に安永、笠原などによっていくつか疑問が出されてきた。了解は限界にいたり、説明に頼ることになるのか、逆に説明できないことを了解が覆うこともあるのではないのか、そもそもこの二つは全く別のものなのかなどいくつかの疑問があげられよう。(8p)

松本雅彦は同じ雑誌の別論文で、次のようにヤスバースを見る。(『臨床精神病理』Vol.13, No.3 Sep.1992 「精神分析学と精神病理学との対話」)

精神病がたとえ病めるものだとし、人間の精神生活の上に生じてくるものであるからには、その精神病を一般医学=身体医学的な科学に還元することは不可能である、と喝破したのはいうまでもなくヤスバースであった。そのヤスバースが提起したのは、周知のとおり、心的存在としての人間(およびその心の病を含めた精神生活)が、「物理的、科学的、医学的な分析によっては捉えられない対象、統一的理論では統括できない対象」であり、「無限のものであるというだけでなく、いかなる首尾一貫した体系をも受け付けられない一つの全体としてある」以上、心を認識する「学」としての精神病理学もその全てをカバーできるような理論は期待できず、としたのである。そこから精神病理学の具体的方法の第一歩を「あらゆる精神的なものがこれで理解できるような要素、機構、法則を掘もうとするのではなく、」「精神生活の個々の側面をそのつど明らかにするような個別の道をえようとすること」以外にはないことになる。これこそがヤスバースの提唱した記述現象学であった。

ところが、このアプローチは、全体をとらえようとしながら個別を記述するという矛盾を引き起こす。この矛盾をヤスバースは「関連」という手続きをとることで回避する。この関連づけという手続きから浮び上がってくるのが、「了解」である。

「了解」とは、心的生活という文脈において相手のなかへ身を移し入れる sich hineinversetzen ことによって、主観的かつ明証的に追体験できることであり、しかも内からの因果性が把握できることである。そのような厳密な規定に従うとき、精神病の個々の体験は、この精神病患者の体験の「了解不能性」を、「了解できないものに行き当たることによって因果的説明に頼らざるをえない」として、一挙に、「病的過程(Prozess)」という概念を持ち出す方向をとった。このようにして、精神病および精神病患者の「全体」は、「病的過程」としてしか「説明」できないものとなった。ヤスバースが「病的過程」なる概念を持ち出したところで、われわれはあらためて、精神病理学に課せられた第三の課題に直面する。つまり「身体」の問題である。ヤスバースの「病的過程」がいったい何を指し示しているのか、彼自身は詳らかにしていないが、「生物学的事象の中である時期におき、生物学的な生の経過の中断によって精神生活に不可逆的な不治の変化を与える」ものと明快に断言しているところから、われわれはこの「生物学的事象」を古くから謎としてある「内因」概念に結びつけなければならない衝動にかられる.....この「内因」概念は、われわれ日常の臨床において、精神分裂病のみならず、うつ病にも、一部のボーダーラインにも、さらには神経症の病態にも感知されるのであり、それでいながら今日なお十分に解明されないまま課題としてあり続けている。

松本は、ヤスバースの了解概念を継承しながら、部分を認識できるのは、「全体直観」であり、「全体直観」を、その都度、患者とのかかわりの中で「記述」していくことが「了解の巾を広げる」作業であるという。別の角度からヤスバースを批判的に継承しようと試みるのは、例えば、中安信夫である。彼によればヤスバースの精神病理学は記述現象学的方法と了解概念を二大支柱とし、以降の精神病理学は、精神病理の「了解不能性」を乗り越えるべく発展したのだが、むしろ、中安は、ヤスバースの記述現象学的方法を徹底させることによって「説明可能性」に接近することを提示する。彼は自己とヤスバースの方法の差異を次のように述べている(『臨床精神病理』vol.14, No.1, Mar.1993 「精神病理学における『記述』とは何か」)

Jaspersは異常な心的体験をその要素心理学的形式の相応性のみに基づいて、アプリアリに、仮説性の自覚なく、類似した心的営為の障害としてしているが、筆者は心的営為のプロセスに関して、仮説設定とその臨床的検証を行うことによって、心的経験を説明することであると考えている。

更に、同じ号で、内海健は、「方法としての了解」を承認して、その了解の行為とは他者についての言説を立てることであるとしている。

このような設問と、その設問を巡る諸解答が、この学会、精神病理学会、60年代の精神医療の改革の運動の中で一度は解体した学会が、現在、復権してどのようなプロブレマティックのまわりを巡っているのかの一端を表している。それでは、このようなプロブレマティックを自らに課したその理由、なぜ、誰の名において、あからさまに言えば、誰の利益のために鈴木や、松本らは言説を立て、その言説の内部で動いているのであるか、「欲望」とか、「了解」とか、「他者」とか、「記述」とかの名において立てられるこれらの諸言説はどのような欲望を代表しているのであるか、その欲望を、その欲望の由来を知って行おうか、それとも知らないのか、知らないふりをしているだけなのか、「彼らは、知っていることを知らない」(フロイト 「夢判断」)のか、その点を問いたい。

2.鈴木は、ヤスバースが、ある謎を残したという。明証性、了解、説明、ヤスバースの提示したこれらの概念が謎のままに残されたという。鈴木は、ゲーデルに言及して次のようにいう。「それは、説明の根拠たる算術の体系に関わる議論で、ある公理系の無矛盾性はその公理体系内では証明し得ないことが導かれてい

る。つまりある公理系はひとつの予科を無視することによってこそ成り立っているわけで、その意味では、論理的説明の基底には、その体系によって暗点に入れられたひとつの了解があるともいえるわけである。」(8p) ゲーデルは、論理学に於ける述語計算の公理の完全性と、プリンキピア・マテマチカやその関連体系での形式的に決定不可能な命題についての「証明」をしているので、「説明」をしているわけではないから、鈴木がゲーデルを引用するのは鈴木が勝手な思い込みをゲーデルに投影して自説を補強しようとしているからに過ぎない。問題はむしろ、鈴木がゲーデルに託して、公理系が成立するためには、予科の無視が必要であると「説明」したのかをどのように了解するかであろう。鈴木は、あるいは大文字のLの弟子たちの信仰のひとつに無視という、あるいは、誤解という概念がある。精神病を、人間という症候を説明するためである。それでは、鈴木はヤスパースの何を無視したのか。あるいは何を無視しようとしたのか。潔癖な精神病理学者ならば、おそらくヤスパースの「原論」のうち、「付録」と名付けられた部分は形而下的である、非現象学的であるとして読みとばすだろう。この無視されている部分に(事実、ヤスパースについての上記の諸説では、この付録に言及した人はいない)焦点を合わせれば鈴木がヤスパースの残した謎としたものの秘密が解けるだろう。

3.ヤスパースは、1913年に「精神病理学原論」を著した。(みすず書房 1990) その著作の付録で彼は言う。

異常精神生活を知るための諸見地を計画に従ってしらべてきたが、なお付録としてごく簡単に実地上のことがらと歴史的なことがらを見よう。まず患者の検査と治療を述べ……(377p)

その検査とは何か

いつももっとも大切な検査方法は患者との話し合いである。(378p)

その検査の目的は何か

客観的なデータによるとしても、患者の話すことによるとしても、精神的、社会的、身体的関係での人間全体の完全な生活記録に到達しようとする……検査の最後にあらゆる成績を考えあわせて病気のグループの何に入るのかの診断をつけることになる……心の中で了解的に一緒に体験しながらはっきりしない関連、結局了解不能の関連を見つける……このような「了解不能であることの体験」が、「病的過程」に対して主観的にかなり確かな保障であっても、それを証明するためにはやはり個々の要素的な症状を探すのであるが、たいていは見つかる。(379-382p)

それでは、どこでそのような検査が可能になるのか

19世紀の経過して行くなかに精神医学に於ける学問的な研究はますます大学の精神医によって行われるようになった。このためにこの学問は新しい色彩を帯びた。この研究はもはや朝から晩までその生活を患者とともにしない人々によって主に促進され、こういう人達は研究室に入り込み、脳の解剖学や実験的精神病理学をやり、心を失い、こせこせし、人間的でなくなり、無教養になった。その代わり大きな利点もでき、いっそう純粋な学問になり、いくつかの領域で連続的な発展の道が開けたし、研究領域が非常に広がった……(しかし引用者)病院精神医学はその手段と材料の点でとにかく学問的な仕事をしなければならず、その盛名のある往時の意義とくらべてひげをとる必要はないのである。精神病院医学のみが長い間患者と密接な規則正しい共同生活をするることによって

精神医学的人間を形成することができるのであって、こういう人がその豊富な見方によって細かく観察した患者の生活期録を提供することができ、患者の精神的関連のなかに立ち入って追体験して感情移入することがますます深くできるようになるのである。(393p)

精神医学的人間! かつて精神病院を変革しようとして苦闘した人々のなかに患者と共同生活を送ることが必要であると考えた人々がいたし、今でもいる。だがヤスパースは、その共同生活の目標が異なる。少なくともそれは患者のためではない。彼はカールバウムを引用する。

一人一人の患者のあらゆる生活現象が診断のために利用され、病気の経過全体が顧慮されるように、臨床的な方法で病像を見ることが必要なのである……ある患者の今の状態からかなりの確実さでこの症例の今までの経過をあとから組立て、これから先の発展を、ごく一般に生命と健康に関してのみでなく、症状の像のさまざまな出現に関してもこまかく、今まである分類法の立場よりもずっと大きな確からしさをもって推定せしめるのである。(312p)

生活のために診断が利用されるのではない。逆である。診断のために生活現象が、それも主要には精神病院に於ける生活全体が利用されなければならない、というのである。なんのための診断か! ヤスパースは精神医と精神病理学者を分けている。いわく

精神医が実地上活動する場合には精神病理学は手段の一つに過ぎないが、精神病理学者というのはこの学問それ自体を目的とする。精神病理学者は一人一人の人間ではなく一般的なものの存在を知り、その性質を知り、それを分析しようとする。(13P)

鈴木やラカン派の人々はアリストテレスがお好みのようだからそのアリストテレスが医術と医者をもど見ていたのかをみてもおくのも無駄ではないだろう。アリストテレスは言う。「技術[理論]は普遍についてのであるが、行為[実践]や生成[生産]は全てまさに個々特殊の事柄に関する……たとえば医者は決して人間なるもの[人間一般]を健康にする者ではなく、健康にするにしてもそれはただ付帯的である、すなわち、医者が健康にするのはカリアスとかソクラテスとかその他個々の名で呼ばれる者どもの誰かをてあって、ただたまたまその誰かに人間であるという一般的述語が付けられもする[がゆえに、付帯的には人間なるものを健康にするとも言われる]というだけのことである。」(アリストテレス 「形而上学」第一巻 第一章 岩波文庫) アリストテレスにあっては、医術と個々の人間を健康にすることは結び付いていた。ヤスパースはもっと野心的である。精神医は精神病理学者とはことなるのであり、精神病理学者の目的は一般的なものを明らかにすること、これなのである。この目的のための諸検査、診断なのである。ヤスパースにとって、「精神的に異常な人間の大多数は非社会的であり、比較的少数のものが反社会的である」(372p)「こういう人間は以前から社会的に死んだグループであった」(373p) こうしたことが明らかである以上、何故彼らを社会に戻す努力と必要があるというのか。

学問の目的は、知って満足を得るといふ主な目的とならんで、その成果を実地に応用してわれわれの生活の目的を達成する手段を改良することにある。

「われわれの生活」……もちろん患者の生活ではない。ヤスパースははっきりと説明している。治療の目的は身体的な病気の場合にははっきりしているが、精神的な病気の場合にははっきりしない、と。「身体的な病気の治療のときには、その目的ははっきりしたものであって、すなわち生物学の意味での健康の回復である。身体医学の諸見地は相手が動物でも人間でも変わらない。しかし人間の心に作用を及ぼそうとすると、

目的はもはやはっきりしたものでなくなる。われわれは、ごたごたと軽重を問わずに並べ立てようとしなければ、次のことをはっきりさせねばならない。すなわちこの症例でいったい何を達成しようとするのか。」(383p) ヤスバースはいったい何を達成しようとしたか、というより彼は何を断念したのか。彼にとって治療の課題はまず、精神障害の身体的原因を処置することである。これは理屈にあっているが、「われわれは、精神的の異常と病気の最大多数についてその身体的原因を何も知らない」(384p) だから

狭義の精神病の多数に対しては、したがって本当に理屈にあった治療という目的は達せられず、隔離監禁して保護することによって患者と社会を守るしかない……医師のやることは次のようなグループに分けられる……入院のときにもうすぐに医師は患者の社会的境遇のことを考えなければならぬ。殊に下層階級のときにそうである……患者を自由に生活させておくことに自殺の危険と公安を害する危険を考慮しなければならない。(急性状態のときには一引用者)患者の状態を鎮静剤で緩和するように試みる。(慢性状態のときには一引用者)環境の影響でできるかぎり患者の精神生活を救ってやるのが任務となる……現在では大規模に、慢性精神病患者は作業に就かせられる。殊に農業と手工業の作業がよい。(384-385 p)

たやすく「了解」できることである。なぜなら、われわれの実践の大部分に馴染みのことであり、であるがゆえに、ヤスバースの知覚にたやすく「感情移入」できるから。それでは、精神療法はどこにあるのか。ヤスバースは、精神療法の意義を次のように規定している。「患者に個人的に精神的影響を及ぼすこと」(385p)と。鈴木ならば、あるいは精神分析学者ならばこのような規定を間違いだ、あるいは傲慢だと言うだろう。なぜなら、精神分析の、あるいは精神療法の基本は「謙虚に」患者の訴えを傾聴することだから、できるだけ沈黙をまもって患者が言うことを聞くことだから。医師のこの沈黙こそが、患者をみづからの真実、ロゴスに導くのであるからして医師はスカンションする以外は患者のパロールに立ち入るべきではない。と。おまえはおまえの真実を、欲望を、隠すことなく言うべしという政治、道徳、煽動がここにある。キリスト教の「告白の政治」の継続といってもよいだろう。だが精神分析とヤスバースのアプローチは対立するものであるか。逆である。カールバウムの意志、ヤスバースの意志、つまり患者の全歴史的な生活と全症状の観察というこの欲求は、患者に対して立てられ、見るものと見られるもの、観察する者と観察される者は、両極に分かれている。精神分析では、両者は合体する。見る者すなわち見られる者であり、観察する者すなわち観察される者であり、欲求する者は欲求される者であり、自己を追跡するものは追跡されるものである。だからラカン的アプローチとはヤスバース的アプローチにおけるイマジネールな双数的欲望のナルシシズムの次元である。それではヤスバースは「了解」概念を実地上ではどのように用いたか。

その基礎となるのいつも特別な個人の了解的な分析である。われわれは了解し得るような精神的関連をできるだけ深いところまで知って、患者に自分自身を正直に知るように助力を与える……人格というものは己の根底となるものと争っている。人格と己の無意識的なものとのこの対立を一つの例でできるかぎり了解し、その際無意識的なものもつ材料と人格の真に求めるものをよく知ることが、はっきりと「教育」的な影響を与えることである。(387)

だが他方、ヤスバースにとって治療の前提となる検査の目的は「了解不能」の精神連関を見つけ出すことである。精神療法上必要とされると同時に精神障害の診断のために了解不能の概念が使用される。「原論」の第6章は、「病像の組み立て」と題されてカールバウム、クレベリン説の紹介と批判をしたあと、基本的には、クレベリンを継承することを明示している。クレベリンの問題設定つまり真の疾患単位を探することは、事実上次の異論によって反駁されている、とヤスバースはいう。第一に全体像からの診断は事実上できなかった。「経験の教えるところによると、全生涯がわかっているのに、それが躁鬱病であるのか早発性痴呆で

あるのかという議論を不可能にし、なんの結果も得られないという例がそう稀ならず存在する。」(315p)第二に、転帰が同じだからといって病気が同じだという証拠にはならない。「或る程度原則的に不治の病的過程というものがあるという見解は非常に尤もらしい。しかしこういうものを別の治ったり治らなかつたりする病的過程と区別する方法は今のところその方法がない。」(315p)第三に、疾患単位という理念は一つ一つの例では実現させることができない。「なぜかというと同じ原因と、同じ症状と、同じ経過や転帰と、同じ脳所見が規則正しく一致するという事を知るには、一つ一つのこまかい関連を完全に知り尽くしていることを前提とするが、こういうことは無限に遠い未来のことに属する。」(315p) こういながらヤスバースは結局クレベリンの言い分を次のように認め直す。

疾患単位の理念は実際はカントの意味の理念で、すなわち目的が無限のところにあるのでその目的に到達することが不可能であるような課題という概念である。しかしそれにもかかわらずこの理念はわれわれに成果のあがる研究方向を示し、経験的に個々の例を研究するときに本当の見当をつけさせる……あらゆる精神病理学の努力はこの理念に到達しようとするのである。

最初の問題に戻って、単一精神病の諸変異しかないのが、はっきり区別できる疾患単位がいくつもあるのかという、両者のいずれでもない。第二の見解を信奉する人は、疾患単位という理念は精神医学各論の研究の成果が上がる検討づけという点で尤もであるし、第二の見解を代表する人は本当の疾患単位というものは精神医学の学問には実際にはないのだという点で正しい。それにもかかわらず精神病をグループに分けようとする、われわれは原則に背いてその時その時に諸見地(原因、心理学的構造、経過、転帰など)の一つを優先させたり、事実上背いて境界のないところにも境界をつくったりして行わなければならない。したがってこういう分類には研究上の価値があるのではなく、教育上の価値しかない。これは作り事である……

ヤスバースにしたがえば、精神病の分類は「作り事」「教育上の価値」しかないそうだ。だが有用な作り事である。どんな有用性か。了解不能の名のもとに保護と監禁を正当化するためである。彼は、病因論的見地から、まず器質性(外因性、症状性)精神病、一例えば進行麻痺、多発性硬化など、次に、病的過程一「これはある時期にはじまり、いつまでも不治のままであり、少なくとも人格の一面の永続的変化をおこし、多くの場合精神分裂性精神生活という心理学的特性を示す。」(319p) 第三に、変質性精神病(偏質性)一「これは偏質、性質が偏っているという意味で、まずクレベリンが躁鬱病とまとめた発病期と周期的なもの、それから精神病質的な異常反応、最後に人格の発展である。」(320p) の三つを分類する。ところが

本当の診断というのは第一群の中に属するものだけに可能なものであり、必要なものである。他の群の中のものについては、症例のできるだけ完全な現象学的、発症学的、及び因果的分析、人格と才能のできるだけ包括的な詳細な把握が価値があるのであって……診断は……本当は不可能なのである。(320p)

なぜ、第一群の診断だけが「必要」であり、他の群については詳細な把握が「価値がある」というのか。精神科医としては「理屈にかなった治療」の対象、つまり第一群の症例を抽出しなければならず、他方で、精神病理学者としては普遍を探求することに目的を、価値を置くからである。それでは、ここでいわれる発症学的了解とは何か。「現象学はわれわれに実際体験された精神的なものの断片、要素をいくつも提供してくれる。すると今度はこういうものがどんな関連をつくっているのかが問題となる。ある場合には精神的なものが精神的なものから、はっきりとそうわかるように、明証性をもってでてくることをわれわれは了解する。われわれはこのように精神的なもののみにおいてる様相で、攻撃されたものは怒り、裏切られた恋人はやき

もちをやくことを了解し、動機からこうしようという決心と行為が怒ってくることを了解する。現象学ではいろいろの性質とか状態とかを心のなかに描き出すのであり、それを靜的了解というが、いまここで述べているのは一のものから他のものがでてくることがわれわれにもわかるというので、これを發生的な了解という。」(27p)「われわれにもわかる」ことが發生的了解の内容なのである。「發生的了解を心理学的説明ともいう」(28p)が、

この發生的了解は殊に精神病理学ではすぐ限界にぶつかる。精神的なものは全く新奇なものとしてわれわれに全く了解し得ないごとくに出てくる……正常な精神生活における精神的発達段階や異常な精神生活の発病期や周期はこのような了解不能な時間的なつながりである。精神生活の縦断面は大体において全く發生的に了解しようとは限らないのであって……(28p)

ヤスバースは、自分にわかることを了解といっているだけなのであるが、すぐにその限界に突き当たる。限界につきあたるのは了解一般ではない。ヤスバースの了解力である。彼に了解できるのは、たとえば「結婚していない、子供のいない夫人が猫をかわいがるとか、弱い貧しいものが、色々な経験を楽しめる強い富んだものへの憎しみから、自分のほうに道徳的あるいは因襲上の価値があるとするとき」(30p) ぐらいのものなのである。彼によれば「気分の病気はわれわれに感情移入ができ、自然であると思われ、狂気は感情移入できず、了解不能で、不自然」(117p)なのであるが、彼にとって「患者自身には了解不能でなく、十分理由があり、少しも妙に思われぬものをわれわれは了解不能と思うのである。何故ある患者は夜中に歌を歌い出すのか、なぜ自殺を企てるのか、なぜ突然家族の者にそんなに腹を立てるのか、なぜ鍵がテーブルの上にあるということが彼をそんなに怒らせるのか、こういうことは患者自身はごく当たり前のことと思っ

ているが、われわれには了解できない」(120p)しかし彼は権力を、すなわち分類の権力だけでなく、了解を基準として分類することによって患者を病院に隔離・監禁する権力をもっているから、彼の了解力を笑ってはならないのである。それだけではない、了解不能なものは脳においておくとしても、了解可能な精神病理的現象を示す人はいかなる扱いを受けるのか。了解的関連を示すことができる異常な機構としてヤスバースは、1. 病的反応 2. 暗示現象 3. 以前体験したことがあとで影響を及ぼすとき 4. 精神生活の解離。をあげている。その一般的特徴として彼ははっきり言明する。

患者が責任能力がないことを欲すると拘禁精神病になり、賠償を得たいと思うと賠償神経症となり、病院で世話をしてもらいたいといろいろな故障を訴えて病院ばかり訪れるようになる。こういう患者はこういうやり方で本能的にその願望を見たそうとする。願望は精神病になることによって満たされるのである。(「目的精神病」)はじめはおそらく意識された仮病から病気が生じ、そうするとその人はそれにもう抵抗できなくなる。またある場合には患者は精神病になることが願望の満足なのであり、これを精神病への逃避という。(199p)……(ヒステリーの場合には一引用者)まさに病気への意志をもつのである……はじめは意識して嘘をつくようになり、その中に意識しないようになって自分でも本当と思う「空想虚言」にまで発展(301P)

要するにヤスバースは、了解的関連の異常機構とは、病気への意志、病気への願望であると言っているのである。こうして、了解不能=治療不能=隔離・監禁、了解可能=病気への意志=道徳的非難の等式が成立する。了解とは、この意志を実証する、ないしは実証したいと欲することなのだ。どこに残された謎があるというのか、ヤスバースの意志ははっきりしている。はっきりしないのはヤスバースの実践的意志を無視して了解とは何かを論じている人々の意志であり、欲望である。けれどヤスバースの実践的意志を明瞭に了解してい

れば、学会の論争の一大テーマになるわけがないではないか。なぜ自分たちの目標をはっきり表明できないのか。それはヤスバースが実践に即して了解と説明概念を立てたのに、その実践をカッコに入れて、精神病理学として完結した枠内でヤスバースの論理を読み込もうとしたからである。

4. 鈴木は無視した、あるいは精神病理学者たちが無視しようとしたヤスバースの秘密は上記のようであるから、次に鈴木は欲望の病理学が、何を欲望しているかについて検討しよう。先の論文で鈴木は続ける

世界について語る際には、不動点を必要とし、その世界の把握について語る際には、不動点そのものを議論の対象としなくてはならないのである。困難はここから生ずる。不動点を狙上へのせるその議論の根拠たる新たな不動点、それはどこに求めればいいのかという点である。そこに、蛇が尻尾を噛むようにしてぐるぐるとまわる吸収、不動点の消失という困難が現れる。精神現象の記述には、いつもこの困難がつきまとうことになる。どこかで、何らかの謎、つまり不動点の消失を経験しなければならないのである。それは「主体」と言われるものを省みる際に必ず出会う謎と言ってもいいだろう。その不動点の消失という事態をどう扱うか(8-9p)

ここに鈴木の問題の出し方の特徴がある。世界と不動点の二元論である。世界の把握について語る際には、不動点そのものを議論の対象としなくてはならないのではない。世界の一部であるわれわれが世界の把握をしている主体を世界の一部として議論するのである。鈴木は中安の「自我意識の異常説」について、「脳の障害を見ている主体というものを、脳の中でどう考えるかは脳モデルにとって避けて通れない重要な課題となるだろう」と述べて批判しているが、鈴木は自分の立てた課題が自説にも要請されることを見ていない。中安のいう脳を主体に置き換えれば鈴木説への課題になる。なぜ鈴木はこの自明なことを見落としたか。それは科学を人間の物質的・対象的实践でなく世界についての言説であるとするためなのだろう。世界と世界についての言説という二元論である。つまり真理に対するスコラ哲学的アプローチの復活である。それは、フッサールやハイデッカーが諸学問の危機を訴えながら学問の具体的内容を検討せずに、学問の意味だけを問おうとした姿勢に似ている。例えば、フッサールの「幾何学の起源」には、幾何学が危機に陥っているとされながら問題の幾何学の内容には一言も触れられていない。「人間的思惟に対象的真理がとどくかどうかの問題はなんら理論の問題などではなくて、一つの実践的な問題である。実践において人間は彼の思惟の真理性、すなわち現実性と力、此岸性を証明しなければならない。思惟一実践から切り離された思惟一が、現実的か非現実的かの争いは一つの純スコラ的な問題である。」(マルクス フォイエルバッハにかんするテーゼ 2)

鈴木は、自分はラカン派であってマルクスの意見には疑義があるというだろう。しかし明証的なことは鈴木は自分で迷路を築きその迷路を解くという「ぐるぐると回る吸収」のトリックに自分を捧げているということだ。これはヤスバースが自分にかけたトリックでもある。ヤスバースは自分の了解が社会的過程でなく個人で成立すると思っている。あたかもラングが一人で成立するかのように仮定している。鈴木は、自分の立場は逆であるというだろう。なぜなら「周知のように」

主体、あるいは経験が成立するためには、体系としての言語が前提とされるということ、つまり言語は、いわゆる直接的な経験をあとから説明するために用いられる道具のようなものではない。(11p)

からだ。だが言語が先か、主体が先か、どうでもよいことだ。はっきりしているのは、ここでも彼は例の二元論を別の形態で成立させているということだ。主体と言語の二元論。だが主体とは何か。ラカン派の人々

のキーワードでありながらいつも暗黙の前提とされる「概念」、主体の分割については語られるが主体とは何かの「説明」はいつもない。

通常は、主体という概念は何らかのまとまりを思わせるものであるが、ここでの主体は分割を前提としているという点である。この分割に際して、主体は何かを失う。それは何らかの否定的な事態である。(11p)

こういいながら、すぐに彼は続ける。

主体は、この分割、何らかの喪失とともに成立する。(11P)

初歩的な循環論法である。どちらが前提か、喪失が先か、主体が先か、どちらでもないか鈴木はいうかもしれない。なぜなら、大文字の他者が主体を成立させているからだ。この二元論をみとめるとしてもそれでは、大文字の他者と主体がかくのごとく関係していると規定する鈴木はその関係のどこに成立するのか、関係の内側か外側か、主体は分割されていると規定する主体である鈴木はどこにいて何をなすのか、何をなそうと欲するのか、彼の論理に従えば、

欲望は、主体の分割に伴って主体が失うもの、この否定的な事態との関係で、その否定性からか衣服しようとする不可能な試み、永遠に実現しない力動をその動因としている。(11P)

から、当然鈴木も欲望も、永遠に実現しない、この力動を巡ってまわっていると、考えざるを得ない。永遠に実現しないとはじめからわかっているものを何故実現しようとするのか、実現しないとわかっていれば放棄すればよい。あるいは、主体に放棄させればよいではないか。簡単な話だ。しかし鈴木は狙いは違わらしい。彼によれば、主体というものは、永遠に実現しない欲望を巡るものだそうで反駁は許されならしい。自分も例外ではない、と彼は謙虚にいうかもしれない。主体を巡る自分の断言と予断が予断ではないと主張する狡猾な戦略である。この狡猾さ、公平・無私を装いながら自分の欲望、というか自分の判断、自分の経験や価値観を忍び込ませるこの戦略がジョークに転化する時がある。例えば彼は言う。

子供が遊ぶのを見るとき、男の子はピストルや車などその機能のはっきりしたもの、何か明瞭な力を表すものに興味をもち、女の子はフリルやレースなど何かの回りでヒラヒラするもの、何かを縁どる、機能のはっきりしないものに興味をもつのに気づかされる。

誰が「気づく」のか。勿論、「われわれ」ではない。鈴木である。彼以外にどうしてこのような繊細にして偉大な事実を認識できようか。ピストルは隠喩的、フリルは換喩的であると彼は言う。それならフリルのついたピストル(手品で出てきそうなもの)はどうなるのか。それは明瞭な力を表すのか、機能のはっきりしないものなのか。あるいは、両者はどうして逆であってはならないのか。又、鈴木ではなく、小出が、フリルは隠喩的であり、ピストルは換喩的であると仮に言ったとしよう。どちらが妥当なのか。

鈴木は言うかもしれない。両者は相対的な問題である。あるいはこれはたとえ話だと。だがこのような類のたとえ話を学会の発表が許すはずがないだろう。換喩と隠喩の区別が重要だと彼は言うかも知れない。彼によれば、換喩とは、僧侶を袈裟であらわすような、全体を部分で、あるいは内容を器で表すレトリックであり、隠喩とは、スパイを犬で表すようなレトリックであり、そこでは両者に共通の性質、意味の類似が機能している。だが袈裟を着たスパイがいるかもしれない、スパイではない犬がいるかもしれないではないか。これも彼一流のジョークだろうか。だが要するに、ある二つの「シニフィアン」の関係をここで決めている

のは鈴木以外のどんな主体でもない。シニフィアンの戯れを楽しんでいるのは患者でも主体でもない。鈴木である。鈴木は言う。「論理的説明の基底には、その体系によって暗点に入れられたひとつの理解があるともいえるわけである」(8p)

彼の暗点はどこにあるのか。論理的説明が彼個人の判断の論理化ではなく、万人の判断であるという思い込む自己了解、不動点をかっこに入れると称しながら、自分をいつのまにか不動点にまつりあげていることの無意識、これである。自分は大文字の他者と主体の関係にどのように関係しているのかをしめすことを暗点にいれながら、密かに自分の主観を言説に挿入しその主観が自分のものではないと主張する客観主義=主観主義。

鈴木は主張するかもしれない。科学は実践とは別である、と。実際彼はそのように告白している。

精神分析は、きわめてテクニカルな知であるはずのものである。しかし、この稿ではメタサイロロジーに偏り、テクニカルな面に触れることはできなかった。何等かのテクニックを目指すときには、そのテクニックを使おうとするわれわれの欲望を問題にしつつ、ここで論じた精神病理学のカヴァーすべき問題領域から、ある部分を切り出してくるというもう一つの作業の段階が必要と考える。(14p)

簡単に言えば、科学では科学者の欲望を考慮しなくてもよく、テクニックでは欲望を考慮すべきだということだ。科学と実践のこの二元論、これを実証主義という。鈴木は、実証主義と実証の区別がついていないようだ。彼にとっては実証科学 science positiveの批判はあってもコント以来の実証主義的科学 science positivisteの批判はない。ここに転倒がある。鈴木という無意識の実証主義者による実証的科学の純形式的批判。こうした批判がpositifであるとは思えないが、彼はこうした批判を通じて自分は実証科学と縁を切ったつもりでいる。これではヤスパースの批判も継承も提起できず、ヤスパースもろとも「自身の精神病理学の枠組みが崩れるのを恐れ」(8p)ることから解放されない。彼の欲望の限界である。

5性の問題に最後に触れておこう。権力概念に問題はあるものの、フーコーによって、既にフロイトの問題系は歴史化された。フーコーによれば、性の問題系はキリスト教的告白の宗教的言説から、フロイトによって精神分析と称する「科学の言説」に篡奪されたのである。近親相姦、倒錯、両性具有、同性愛、これらの事実をフーコーはとるにとらないことだという。問題は、それらが、ある特定の時代に、特定の仕方で、ある科学の名のもとに主題化されたその形態である。彼は言う。問題は権力の行使のされ方であり、その行使がもたらす矛盾が深刻であるがゆえに権力は性を主題化せざるを得ない、と。商品、貨幣、資本の運動が要請するあらゆる人間関係の破壊、排除、集中、分類、管理、それらから、

個々の人間が愛し合い始めること、それこそが問題なのです。制度は虚を突かれてしまいます。諸々の感情強度が制度を横断していますが、それらは制度を同時に維持し、かつ攪乱しているのです。軍隊をご覧下さい。男同士の愛が絶えず要請され、非難されています。制度的諸コードは、多数の強度、可変的な色彩、見えにくい動き、移り易い形態をもったこうした関係を合法化することができないのです。制度内にショートを引き起こし、法や規則や慣習のあるべき所に愛を持ち込むこうした諸関係を。(「同性愛と生存の美学」ミシェル・フーコー 哲学書房 1987)

個々の人間が愛し始めること、これこそが問題なのだ、と、フーコーは言う。

18才の工員が3人の小学生の女の子を連れ去った。彼は彼女たちをホテルに連れて行った。ホテルの従業員は警察に通報した。彼は逮捕されたあとこう言う。「彼女たちと友達になりたかった」と。友達になろうとすること、この単純なことさえ、合法でなければ、あるいは制度が容認するあらゆるタイプの売春では

いがゆえに弾劾され、神秘化され、ある場合には精神鑑定の対象になるのだ。軍隊に於ける同性愛については、フロイトも、抑圧論の観点から観察している、「狼男」も軍人であった。だがフーコーは、抑圧論では、同性愛は解けないという、彼がいうのは、例えば家族や軍隊において近親相姦、同性愛が要請され、同時に非難されなければならない理由は何なのか、何故、精神分析的言説がその問題に関わり合うのかということである。現在、アメリカでもロシアでも軍隊内での同性愛の合法性を巡って論争しきりである。鈴木ならこの問題にさぞははっきりした解答を与えてくれるだろう。鈴木は遠慮しているかもしれない。関わり合っている領域が違う、と。関わり合っているのは精神分析であって政治ではない、と。しかし、精神分析自体が政治の一形態、真理を告白し、真理に仕えるようにとたえず煽動する政治であるとすればどうか。つまり性の言説の精神分析化であり、精神分析による囲い込みを通じて性は神秘化され、特権化され、脱政治化という外見を整えることで政治化される。戦後、フランスに於ける人口政策を担う一翼として精神分析が活用されことは興味深い。この点についての研究はドンズレらによってなされた。人口政策として科学を使用すること、ナチは周知の人口政策として精神医学を採用し、精神医学も積極的に荷担した。ヒトラーは「我が闘争」において、貨幣の支配に対する闘争、資本家に対する闘争を呼びかけ、対置する目標として文化を掲げた。その文化の課題は血と人種を貨幣から、ユダヤ人から、梅毒から保護することなのである。そのための早婚奨励、売春制度への弾劾、ブルジョアのだらしない生活から縁を切ることである。

結婚も、それ自体を目的とするものではあり得ず、種と人種の増加および維持という、より偉大な目標に奉仕しなければならない。これのみが結婚の意味であり、課題なのである。(「わが闘争」上 角川文庫 358p)

この目的に照応してクレベリンは、1921年、「根離れについて」という論説で、大略次のように述べている。

精神活動が肉体を基盤とするように、人の精神人格もその群居動物的な基盤を閑却しえず、その形成の培土であり、母胎でもある家郷や民族生活に値をおろすことによって、健康と力を得る。その色々な「根離れ」の危険に対処することは大事であって、国内入植の幫助、家系研究、一族財団、早婚結婚の幫助、子女教育の援助、児童の稼働の禁止、酒場の制限、国際主義の破壊作用に対する防遏、民族の精神結合の強化、などがそれに役立つはずである。これらのことは、精神医学を越える問題でもあるが、無関係というものではなく、この「根離れ」の問題は、一つの科学の未来の発展を予想させるものであって、即ち「社会精神医学」がそれである。(「精神医学百年史」204p 金剛出版)

勿論、このようにいうのは、クレベリンであって、ラカンではない。だが、ラカンは、クレベリンの問題系を精神分析という方程式に置き換え、クレベリンがアリア民族の保護という名目で社会防衛論に進んだことに照応してラカンは文化に名を借りて個人に有責性を掃することによって社会を守ろうとするのである。

精神分析は、ちょうど文明の不安が文化と自然の接目自体をむきだしにしてきたように、それぞれの社会において基礎的な機能を演じているかにみえる関係の面での緊張を発見したきたのです。われわれは式の変換を正しく演算していくという条件をつければ、精神分析の方程式をもってこれを利用することが可能な人間諸科学に、とりわけこれからわれわれが見るように犯罪学に敷衍していくことができるでしょう。ここで付け加えておきたいのは、犯罪学の真理の鍵の一つである当人の告白によせる依存や、犯罪学の応用目的の一つである共同社会への復帰などが、分析的な対話によってとりわけ効果のある形式を発見できる……(「エクリ 1」174p 弘文堂)

文化の保護のための犯罪者の告白、告白のこのような強調、犯罪者の人間性を尊重すると称しながら、告白に頼って犯罪者の責任を徹底的に追求しようとする、分析的対話による「共同社会」(そして何という共同社会であることか)への復帰、このような方程式こそ、証拠主義を原則とする近代刑法学が批判してきた中世的弾劾制度そのものではないか。形を代えて現れた中世、あるいは告白の政治。近代刑法学は告白への不信を基本にし、本人の告白よりも証拠を基準として犯罪を裁くことを提唱した。ラカンはこの提唱に異議を唱えているのである。近代刑法が間違っていると鈴木は言うかも知れない。いいだろう。しかし、中世的告白が、精神分析においては性を中心として回りはじまる、この簡単な事実が鈴木も認めざるを得ないかも知れない。フロイトは患者を性的にからかった(セクシュアル・ハラスメント!)が、そのからかいに患者がのってこないと「抵抗」しているとした。幸にも、フロイトの分析対象になった多くの人々はフロイトの誘いにのらなかったことはフロイト自身が詳細に記録している。一方ラカンの前に現れた犯罪者が(勿論、長期拘禁を前提としているが)、諸々の理由から完黙を貫けば、ラカンの目的は達せられない。要するにフロイトほどあからさまにないとしても、今度は、「真理」をアリバイにして告白を正当化し、強要する政治が現れ、現在に至っている。

安藤一夫

1) . 問題の設定

「資本主義の経済システムを変革するには二つの方法しかない。一つは資本家階級が独占している生産手段を収奪することであり、もう一つは、労働者階級が資本家階級のもとに働きに行かないことである。」(本誌6号、22頁)

このように問題を提起したあと、前者の方法についてはロシア革命で実行されたものの、その後、商品・貨幣の廃絶の問題でつまづき、今日の時代の方法としては現実性が薄れてきているのに対して、後者の方法の現実性が増してきているのではないかと述べたことがあった。そのとき、後者の方法は「いまだ革命の戦術としてはまとめられたことはない」(22頁)と考えていた。

ところが、『アリスメンディアリエタの協同組合哲学』(みんけん出版)を読んでもと、後者の方法が革命の戦術としてまとめあげられていることが判明した。この本に則して、革命の戦術としての後者の方法(「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命)を紹介しよう。

2) . 最初の10年、実践性

アリスメンディアリエタは、1941年にカトリック教会から神父として、生まれ故郷のモンドラゴンに派遣された。着任してすぐ、青年労働者の研究サークル(カトリック労働青年団)の研究活動に参加する。

「労働者は、教育と自己自身の労働を通じてのみ自分を解放できる」(前掲書、66頁)という一つの明確な思想をもっていたと言われる彼は、43年10月には技術専門学校を開設し、技術教育の場をつくとともに、他方で労働者の未来の指導者を育てることを目指して、社会アカデミア(研究会)を組織し、精力的に研究会を開いた。

しかし、45年頃には、教会の主流とのちがいが表面化し、彼は、教会の立場にこだわらず、民衆に学び民衆と共に歩む方向を意識するようになる。教会が、スペインの再キリスト教化のためにカトリック行動団を組織し、それを「教会と国家を支援するための神の道具」(同、80~81頁)と位置づけていたのに対し、彼は、「青年の組織化に力を注ぎ、同時に強力な社会意識を青年たちにもたせようとした」(同、81頁)のだった。45年のカトリック青年労働者団の会議で彼は次のように述べている。

「カトリック使徒により組織され、法王に認知された神の道具たるカトリック行動団の使命は、社会的精神・感性をもって人々を組織化することである。大衆の信頼を得るようにし、同時にプロレタリアートの昂揚を法王の呼びかけにより獲得しなければならない。」(同、81頁)

このように、教会主流とのちがいを明確にしたアリスメンディアリエタは、以降、社会教育に全力をあげるとともに、社会・経済の研究を続ける。2日半に一回は研究会に出ていたと言われていた程の熱心な活動が続けられたが、それは次のような構想の下に進められていたのであった。

「私たちは、各地方における活動、宣伝プランをすでにもっております。情報連絡網をつくるのが私たちの前進を図るために必要であります。その組織は地味で真面目であり、かつ少しでも大衆を動かすための必要な全てのものを展開する能力が必要です。私はあなたの目的理念に役にたつよう、手持ちの発行パンフレットをいくつかあなたに送ります。新しい団体機関の設立という理念を打ち出すほどには、事はまだ成熟していないと私たちは思っています。そうした取り組みの前に、人々の前に私たちの優れた点を着実に示したいと思えます。そして、労働者を具体的なきちんとした目的の周りに集めたいと思えます。あれこれの原則を掲げるだけの宣伝というものがありますが、現時点では何の役にもたないものです。諸原則の適用や対象の具体化は、とりわけ特権的な階級の人々によって、より困難なものとして現れています。一般的原則をひけらかすことは容易ですが、しかしその中身を実践する段になると、ただちに司牧たちを慎重に分別くさくさせるのです。」(同、88頁)

ここで述べられている「労働者を具体的なきちんとした目的の周りに集めること」は56年の最初の協同組合の誕生をもって現実化するが、そのときには教会主流に幻想はもっていなかった。

「社会伝道や『労働者と仲間付き合いをする』という分野で、真面目に行動する戦闘的部隊を組織しなければなりません。私が気付いたことは、人々はわれわれの呼びかけに対してその都度応えることに疲れており、司教文書に載っている教義のあれこれには少しの説得力もないことです。一方、司教にしる使徒にしる、キリスト者の使命として任務を遂行する決意と連帯もあまりみられません。私のみるところ、すでに教義はわれわれの精神的ブルジョア化や不真面目さの表れを暴露するための批判に少しもなっていない、と思われます。」(同、85頁)

3) . 協同思想への目ざめ

社会アカデミアをはじめから6年、ネットワークづくりを進めるなかで、アリスメンディアリエタは、協同思想に目ざめていく。まだ協同組合や協同組合主義という形をとってはいず、イメージされているものは共同体であるが、49年に書かれた文書には、すでに「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命の戦術の萌芽が生まれている。

「わたしは適切な表現ができるような言葉〈協同〉を使った。しかし、社会生活の中でもつこの言葉の重要性に対して、私としては言葉足らずであることを恐れる。協同は、それによって前進が可能になる唯一の道を示すものである。即ち、真の公正や社会的平和へ到達することのできる唯一の道を示している。この道によって自分の歩みを正しくすることのできない個人や集団は、時間を失うばかりか、たいていは喪失や破滅にしか出会わないのである。

われわれは互いに必要としあっている。相互に補完しあうものとしてわれわれは呼びあっているのである。孤独に耐える力ある者は、神か動物であると、ある高名な哲学者は述べている。言いたいことは、諸階級は互いに必要とし協力しなければならないということである。人民と諸権力は分離してはならない。諸制度は相互援助を行わなければならない。このことを真面目に追求するならば、共同の福利も全員の福利も、たとえ礼

儀や虚栄やおごりや支配欲を隠すものでしかないもっともらしい理由によるしる、排他的な特殊な個人主義的な意味はもっていない。このためには、企業家がいよこをおこなうということだけでは十分ではない。真の共同が存在するためには、そこに労働者が参加する必要がある。また、労働者が大きな改革を夢想するだけでは十分ではない。事業家や企業家はその熱意・技術・経験を持ち寄ることが必要である。即ち、諸権力が大目標を決意するだけでは十分ではない。というのも、それを達成するためには、常に彼らが手中にしているもの、あるいは到達点以上のものを必要とするからである。……

全員を一つにするために、各人にその立場を指示する努力を止めなければならない。そしてわれわれの全ての力が共同財産の獲得のために向けられた真の共同体の建設のために、相互の範囲の中で任務と感情を相互に一致させて共生していかなければならない。その中にまさに人間の社会性が成立するのである。忘れてならないのは、共同のために献身することは、共同体の充足にも合致することである。」(同、192～3頁)

この文書はまだキリスト教の社会教義の枠内にある。但し、協同によって共同体を実現していくことのなかに「人間の社会性」を見ていたことが注目されるべきだろう。ここに現実の社会とのつながりがあり、アリスメンディアリエタの提起の実践性があった。

この本の著者は、「アリスメンディアリエタの考えの中では確かに階級闘争が最小の役割しか果たさず、あるいは実践上欠落している。彼の基本的概念は全く逆のもの、即ち、協力だからである。」(同、190頁)と評価している。

確かに文字通り受け取れば、この文書は「諸階級の闘争を呼びかけたのではなく、諸階級の協力と協同を呼びかけ」(同、192頁)ている。しかし、著者も述べているように、現実はこの協同を実現しようとするれば、団結の力による他はなかった。

「労働者大衆に示された困難は、まさにアリスメンディアリエタの目には、共同体のこの偉大な仕事において彼らが指導階級として人間としての尊厳をもって協同することが認められていないことであった。したがって、彼らは力によってその協同を強制しなければならない。そしてプロレタリアートの力は、団結と労働に基づく。」(同、193頁)

著者がここで述べていること、これはアリスメンディアリエタにとっては実際に協同組合をはじめなかで明確となったようであるが、協同も力によって強制されなければならないとすれば、それは一つの闘争に他ならない。アリスメンディアリエタの協同の提起は一つの階級闘争を含んでいたと見る方が正しいであろう。この階級闘争の一つは文化革命であった。50年には「文化の社会化」が提案される。

「われわれの前にある社会における最も悲しい遺産は、教育や訓練の機会の欠如であり、経済的な不平等であろう。経済の不平等の解決が、その基盤において、教育や文化の社会的不平等の解決と一致しない場合、社会生活の進展には少しもならないし、さらに、社会生活は自動的に消滅してしまう。今日、広範な特権を享受している経済的不平等と文化や教育の機会における排他主義は、人間社会を協同の連帯や兄弟愛的展望もなく閉じられたカースト制や階級敵対へと追いやるものである。

したがって、現代の要請に対してより調和した社会的規則、社会の中で不可欠な進歩を形成しなければならない社会的規則は、文化の社会化である。そうなのである。親愛

なるモンドラゴンの皆さん。文化の社会化は、階級のこれらの障害をとりのぞき、われわれの社会の特権層の独占を緩和させ解消させるために不可欠な、何よりの手段なのである。本来の意味でいえば、富の社会化よりずっと重要であり興味深いものである。富が社会的に誰かに横領されていようと、文化の社会化の改革がまず第一におこなわれていなければ重要性をもたない。

学校が開設されるたびに監獄が一つ閉鎖されると、以前ある有名な労働運動指導者が言った。しかし文化や簡素な教育のための学校が開設されることが、監獄が不要なものとして自動的に閉鎖されてしまうことになると考えるほどにはわれわれは単純ではない。だから、われわれが各教育施設の準備を始め、人々や一四歳から二十歳の未熟な青年に向け開始すれば、学校は克服すべき社会的構成のための新しい障壁となり、彼らに社会生活における新しい影響力のある分野を開く障壁となり、プロレタリア大衆を訓練し、組織し、意識的なそれゆえ健全で自由な、社会において自らの運命の主人となる人民に変革する障壁となることは確実である。

人が働く社会の中で、保障制度を受ける権利をもっている者もまた何らかの理由で働くことのできない者もまた、共同体の社会保障を受けられることができ、他人の援助を必要としない者は誰もいないことを忘れずに、各人がそのもつものを各々に与えることをまさにその目的として共同体が組織されることが、共生と相互尊重の中で生活の可能性としてわれわれに保証されるのならば、結局誰も何も失わないであろう。おそらく、この種の社会の発展の可能性についてはわれわれはあまり信を置いていない。しかしながら、今日確信できることは、生活のこれらの社会的条件を創造するための努力をおこなうことである。さもなければ、われわれの文明は台無しになるであろう。われわれは決然とこれらの条件を創造するところまで前進するのか、それとも武力によって容易に抑え付けられてしまうなどとは考えてもみない革命に巻き込まれるのか。これらの条件は公正の精神、平等、真実に対し影響を与える物であり、戦車の壁によっては抑え付けられないものである。」(同、189～190頁)

ここで展開されている思想は、「文化の社会化」という綱領的課題を実現するシステムとして、協同にもとづく共同体が考えられており、この生活の新たな社会的条件を獲得するために努力することを呼びかけている。まだ共同体のイメージは具体的ではなかったが、その共同体は、フーリエやオーリンのように、ユートピアとして位置づけられてはおらず、「文化の社会化」のための拠点として捉えられている。

はじめに引用しておいた49年の文書にあった「人間の社会性」が「文化の社会化」として捉えなおされたとき、共同体の組織化が一つの戦術として浮かび上がることになる。

4) . もう一つの社会変革

書かれた時期は明記されていないが、共同体の構想が協同組合の設立へと具体化され、その事業が開始されて以降のものであろう。アリスメンディアリエタはすでにこの時点で、「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命の戦術を明らかにしている。

「これまで基本的権利を守るため、不公平な搾取を避けるため、専横をやめさせるた

めに労働者の団結が主張された。

今日、われわれは労働の尊厳に見合った地平の推進のために、平均的な市民として社会政治的生活においてきちんとやっていくために、われわれに与えられた団結の力に頼らなければならない。というのも、外部からの保護を受けたりしていると、われわれは常に未成年とか二流の人間として扱われるからである。しかし、この慎み深い『従属』の状態は、基本的な発展や活動の要素としての投資がわれわれに無縁のものとしてある限りは、終わることはないであろう。即ち、われわれは投資をあたかもわれわれの活動の可能性や未来においていささかも影響しない重要でないもののように考えてはならない。そうではなくて、投資は活動と克服の基本的な鍵である。それ故、われわれの投資は緊急を要するのである。企業におけるわれわれの協同、即ちわれわれの労働で稼いだものを企業の設備に投資すること、給料を消費でなく投資に振り向けることである。この時以来、われわれはいわゆる企業家たちと同程度に企業を確保したということが出来る。企業家とは、企業の発展のための財政化の必要性に向けてわれわれの資金を守り条件づけるための資産を手中にしている者である。企業家は、これ以後、労働と財政のためにわれわれを頼りにするであろう。」(同、194～5頁)

協同組合で働く労働者が、単に賃金を受け取るだけの雇われ意識にとらわれた存在であってはならず、賃金を消費にだけでなく、投資に振り向けねばならないこと、この企業における協同を実現するために団結が必要であること、この提起は、「もう一つの働き方」のキーポイントを突いている。

「もう一つの働き方」が、単に、資本家の下での労働からの逃避でなく、積極的に社会革命をめざした一つの社会運動としての意義をもつためには、企業における協同を実現して、資本家的企業に負けないだけの投資をしなければならない。そうしなければ、それは「文化の社会化」の拠点になることはできず、社会に協同の力を示すこともできない。

「われわれは多少なりとも、幸福な消費者である以上の者になる決意が必要である。即ち、われわれは投資家にもならなければならない。というのも、単なる消費者としてわれわれがしていることは、結局われわれの搾取者に対し、彼らを排除しようと一方の手でしながら、他方の手を貸しているようなものである。われわれは両手をしっかり保持し、慎重さを要する二つの機能の責任をもたなければならない。その機能とはわれわれの力を取り戻し諸力を償うために必要な消費の機能であり、もう一つは、われわれの未来をみるための、世代間の連帯を強めるために必要不可欠な投資の機能である。この投資家としての機能を果たすために、われわれにとっては団結が気位を確保することと同じかあるいはそれ以上に必要なのである。」(同、196～7頁)

この団結がどのようにして保障されたか、これについては、この本の訳されていない部分を参照することが必要であり、今回は検討できない。しかし、これまでの展開を見る限りでも、アリスメンディアリエタは現実から学び、自己の思想を発展させてきた人物であることがわかる。したがって、彼の思想のなかには、モンドラゴン協同組合群に結集している人々の集団的な知恵が含まれていると見るべきだろう。

逆にいえば、モンドラゴン協同組合群は、その活動の中で、「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命の戦術を実践してきたが故に、ここまで成長してこれた

のであり、その実践がアリスメンディアリエタの思想に反映しているのである。だから、モンドラゴンに対してしかけられた二度の論争、(64年と70年以降、後者はバスク新左翼が相手であった)でも、彼は単に自己の過去の見解を守ることはせず、運動の発展に必要と見れば、相手の論議をも受け入れた。その結果、主として、バスク新左翼との論争の中で、革命の戦術を体系化していく。最後に、この体系を見ておこう。

5) . 日々持続する革命

協同を団結で実現し、文化の社会化をはかって、日々革命を実践していると自負していたアリスメンディアリエタにとって、新左翼が主張した暴力革命による政治的変革は見込みない試みとしか考えられなかった。

「瞬間的な打撃による革命の賞賛者や帰依者がある。その成功のために多くの好条件があり、またたとえ多くの人々の犠牲がなく成功する場合でも、革命は多くの他の人々が出発できるところから始めなければならない。われわれに必要なのは、展望のない計画や具体的な目的や効果的な貢献の要請のない計画を見分ける力である。使命と不屈さの能力をもって活動する人にとってそれは必要である。」(同、255頁)

「革命は、一にも二にも人々とともに、または人々のために影響を与えようとする変化であり、代案である。多くの人々をたきつけ一時的でしかない革命は、いささかつくり話めいて少々喜劇的である。このような革命はわれわれに役に立たない。生活は過去・現在・未来の諸関係の織物であり、空虚からつくり出されるのではない。経験は他人のものでも自分のものでも、豊かなものであり、積極的な財産である。変革はもしわれわれが実際にそれを推進することを望むならば、強制されるべきではない。」(同、255～6頁)

アリスメンディアリエタにとって、革命とは大衆が担えるものであり、かつ日々持続するものでなければならなかった。彼は一度も政治革命の立場に立ったことはなく、従って新左翼の主張をどこまで正しく理解していたかという点については疑問が残る。もし正しく理解していたら、彼の反論は、政治権力を樹立してから社会変革を始めるという戦術への批判へと進展されていたであろう。とまれ、大衆が担え、かつ日々持続していく革命について次のように提起されている。

「革命が大衆全員により分担される変革の過程として、また大衆により十分に考察されて維持されるものとして確認されるにつれて、事実上、革命は最良の道であり、そこでは何も完成していないが、しかし、全ては望ましいものになる。固定化された世界は、人間的世界ではない。というのも、人間は超克の願望をもつ主体であり、それによって洞察と同様に活動的使命と運命をもつのである。変化する世界において完全で決定的な解決というものはない。世界は、人間がその中で優越性を示そうとするための多くの魅惑に満ちているのである。まさに、自分のために活動し、同時に活動的であることで自分の優越的な諸価値を確認するのであるが、それは、自然を耕作し豊かにするばかりでなく、自然を人間の必要と人間たちの共存のために調和することである。

そのために必要なことは次のとおりである。

(イ) 労働に参加すること。

(ロ) 共同の利益のために必要な組織や適切な推進のための仕事に参加すること。

このためにわれわれは協同組合主義者に呼び掛ける。われわれは労働の各選択肢の応用をつくり始めている。われわれは労働者と連帯主義者は自然を変換できる者であり、自然の中で分担しあった力で新しい有用性を生み出すことができると確信している。しかし、それらの成果と有用性が配分や応用の最良の方法をもたない限り、われわれの活動は維持防御することはできない。」(同、266～7頁)

この提起は、企業における協同の保障である投資を団結によって実現していく、という「もう一つの働き方」のキーポイントを念頭におかなければ具体的なイメージを結ばない。このイメージをつくるために、労働者への呼び掛けを紹介しておこう。

「労働者よ団結せよ。付け加えるならば、労働者よ、今日あなたがたの労働と自らの管理が、あなたがたを無力にする疎外に陥ることのないために、不可欠な権力を強力に進めよ。あなたがたは自らを統治し運営する力をもたなければならない。協同は、直接的な真に責任ある活動により、常に外部の介入を排除するものである。あなたがたは全てを協同に向けなければならない。」(同、263頁)

この呼びかけに、今日のわれわれは、心を躍らせることができるだろうか。もちろん、文字通りに受けとって、それは死んだメッセージにしかならないであろう。ワーカーズコレクティブを目指そうとしている人々が、このメッセージを自分のものとして受けとめ、それを自分達の実践に活かそうとするとき、はじめて、連帯が生まれてくるだろう。この連帯にもとづき、「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命の戦術を自分達のものに上げていくことがいま、われわれに問われている。そのとき、次の問題提起が入り口となる。

「われわれは神話ではなく労働に基礎をおいた革命を必要としているのである。嘘や虚偽・過ちではなく真実の支援を受け、われわれは団結を達成しなければならない。現状の『消費のための消費社会』は、単なる物質的な幸福にわれわれを紛れ込ませる。その収支表には人間は物として記入されており、人格としてではない。われわれの間では、協同組合運動は、われわれを人格として呼び掛け支援し参加させる。したがってわれわれは、その指導性と責任の遂行とによって、われわれの創造的能力をその細胞から、あるいはその創造的労働の器官から引き出して企業をつくる。こうしてわれわれは、人間の尊厳と共同体の要請とに関連して、経済の新しい変革の活動を強調し、新しい社会—経済体制を生み出すことができるのである。」(同、268頁)

6) . モンドラゴンの普遍性

アリスメンディアリエタの主張する協同は、共同体の内部にユートピアを創ろうとするものではなく、それを拠点に文化の社会化をはかり、社会全体を変革しようとする方向性を持っていた。

初期のキリスト教の人間回復論は、労働における協同を団結の力で実現する、という社会的意識へと成長させられることによって、実践的なものとなった。

労働の尊厳を協同によって実現させようとするとき、従来の階級闘争の中で試みられてきた労働組合運動や、政治闘争のための政党活動とは別の種類の階級闘争を切り開くこととなった。それは、協同組合企業で資本家的企業に負けない投資を実現し、経済競

争の面で資本家的企業に打ち勝とうというものだった。

企業における協同はこの目標を実現することにおかれ、ここから、協同組合企業の組合員が団結によって投資を積極的に進めることが一つの闘いとして、成立することとなった。

そして、バスク新左翼との論争の中で、この一つの闘いは、「もう一つの働き方」を実現することを通じた社会革命の戦術へと体系化されていく。

このような新たな社会革命の戦術が、モンドラゴンで実践できたことは、もちろんバスク地方の特殊な諸条件にもとづいている。バスク民族の自決への意志、労働組合運動や新旧左翼の大きな影響力などによって、フランコ独裁下でもある種の解放区としてあったこと、それらがモンドラゴン協同組合群の戦術を支えてきたことは間違いない。

しかし、モンドラゴンでの成功をバスク地方の特殊性にのみ求めることは出来ない。そこに、このもう一つの社会革命の戦術が体系化され始めようとしていることを知るならば、その戦術がはたして、今日の世界で有効なものとして採用しうるかどうかについて検討することは、今や運動家にとっての義務となっているのではなかろうか。よく言われるモンドラゴンの普遍性なるものは、このような見地に立つことによって初めて見えてくるだろう。

そこでアリスメンディアリエタの戦術を検討してみると、実はそれが、社会革命への展望を持っているが故に、プロレタリアート独裁下の文化革命の路線として機能していたことが明らかとなる。モンドラゴン協同組合群の成功の秘密は、プロレタリアート独裁の下における社会革命の戦術を、プロレタリアート独裁を実現する以前から実行していたことにある。この意味において、ポスト「社会主義」の社会運動としての普遍性がそこには存在している。

A S S B 誌刊行計画

安藤一夫

1) . 初年度の成果

A S S B 誌の初年度の刊行を無事終えることが出来ました。支えて下さった皆様、またいつも原稿を寄せて下さった同人の方々には深く感謝しています。初年度の研究活動で私自身にとって最も手ごたえのあったものは、マルクス主義の理論と運動の総括でした。商品・貨幣は本能的共同行為によって生成されるものだから、意志（政治）の力では廃止できないこと、従って新しい文化を形成しなければならないこと、およそこの二点が出発点にありました。しかし、政治が何故、影響力を失っていくのか、新しい文化はどのようにすれば形成しえるのか、はたまた、プロレタリアートの独裁の継承ということはどうするのか……、解決しなければならない課題は山積していました。

問題解決のポイントは足元にありました。資本家階級の生産手段を収奪するのか、それとも、「もう一つの働き方」を実現して、資本家の下に働きにいかないか。後者の方法が革命の戦術として成立するとすれば、これまでのマルクス主義の運動上の常識を全てくつがえすこととなります。

十分に意識化はされてはいませんでしたが、私の念頭には、いつも、プロレタリアートの独裁の下での社会革命の展望を明らかにしない限り、マルクス主義は生き残れない、という考えがありました。この課題は、プロレタリアートの独裁を実現しているかいなにかかわらず、マルクス主義の運動家に問われていたのです。

後者の方法について気付いたときも、プロレタリアートの独裁の下での文化革命との関連や、新しい社会システムのルーツづくり、といったレベルで問題を捉えていました。ところが、モンドラゴン協同組合群の指導者、アリスメンディアリエタの思想を検討したとき（本誌「もう一つの社会変革」参照）、後者の方法はすでに定式化されていた、ということが判明したのです。

そして、後者の方法は、前者の方法とは全然別の種類のものではなく、前者の方法が成功し、ロシアでプロレタリアートの独裁が実現された、という前提の上にその社会革命の戦術としての有効性が生じてきている、という注目すべき事実が浮かび上がってきました。

つまり運動上の継承関係が明確になったことによってマルクス主義の運動上の欠陥は、指導者達の意識（凝り固まった政治的精神）にあったことが明らかとなったのです。マルクス主義の見地からの社会批判、社会的精神こそがいま再興されねばなりません。

次年度のA S S B 誌への私のかかわりは、この社会的精神の再興というところに重点を置きたいと考えています。

2) . 残った課題

A S S B 誌の年間基本計画のうち、現代の多国籍企業、現代の世界信用経済圏、廃棄物と社会システム、人口、資源、エネルギーと社会システム、以上四つの課題が残りました。

した。

前二者については邦語文献に欠けること、後二者については、槌田エントロピー論が使いものにならない理論であり、それに代わる理論が未開発であること、が残ってしまった原因です。

また、準備号「21世紀デザインのための5つの仮説」にそって見れば、2) 革命とはどういうものか、5) 科学的知から文化的知へ、の二つの課題についての解明は進みましたが、1) 世界はどうなるか、には迫りませんでした。なお3) 物質、価値、エントロピー及び4) エコロジーとエコノミー、については、エントロピー論の限界を示すことで、テーマ自体に発展性がないことを明らかにしており、一応解明しえたものとみなしたいと考えます。

3) . '94年度研究計画

初年度のように、テーマを決めることは出来ませんが、無意識の解明についてはずっと続けていきます。商品・貨幣の無意識を手がかりに、言語や社会の無意識の問題に接近していく予定です。

次に、「もう一つの働き方」を実現することにもとづく社会革命の戦術を今日の全世界に通用するものへと具体化していくために、研究課題を設定していきます。

4) . '94年度刊行計画

'94年度は隔月刊とし、年間6冊発行します。5月より刊行を開始します。会費は正会員年間1口10万円、賛助会員年間1口3万円、購読会員年間1口1万円とします。会員の特典などは別添チラシを参照して下さい。

